東京外国語大学『語学研究所論集』第 18 号（2013.3）, 55-93

〈研究ノート〉

朝鮮半島における言語接触
―中国圧への対処としての対抗中国化―

伊藤 英人

1. 本稿の目的

筆者は伊藤英人(1995ab，1997ab，2002，2004abc，2005，2007ab，2008ab，2009，2010，2011)，ITO(2004)等において，韓漢両言語間の言語接触の問題に関する考察を試みてきた．本稿では古代漢四郡以前から朝鮮時代に亙る韓漢言語接触を概観するため，研究ノートの形でこの問題を俯瞰することを試みたい．古代から朝鮮時代という長期間に亙る問題であるため，専論の形では当該の問題の俯瞰をなし得ないが，中国化(sinicisation)と対抗中国化(counter-sinicisation)の観点から朝鮮半島の漢字文化受容の傾向を大きく見ることで，問題の所在を明らかにしたい．

2. 漢語との接触

2.1. 漢人の朝鮮半島への到達[1]

漢人の視野に朝鮮半島が入ったのは，周代のことである．『詩経』「商頌・長發」:「相土烈烈海外有截」の「海外」は朝鮮半島北西部と看做すのが通説である．紀年の確実な「朝鮮」の記載は『史記』(BC91 頃成書)「蘇秦列伝」の BC334 年の以下の記録である．

(蘇秦) 去遊燕 歳余而得見 説燕文侯曰 燕東有朝鮮遼東 北有林胡樓煩[2]

合従連衡で張儀と共に知られる蘇秦が燕の文侯に「あなたの国は東に朝鮮，遼東を持っている」と説いている．『後漢書』(五世紀初成書)「東夷列伝」は

漢初大乱 燕斉趙人往避地者数万口 而燕人衛満撃破準 而自王朝鮮

秦末漢初の動乱時に河北，山東，遼東の漢人数万家族が朝鮮に難を逃れたこと，燕王盧綰の部下の燕人衛満が伝説的な箕子朝鮮の末裔箕準を滅ぼし朝鮮王となったことを伝える．同じ内容を成書年代の古い『史記』「朝鮮列伝」は次のように記す．

> (衛満)亡命 聚党千余人 魋結蛮夷服 而東走出塞 渡[水貝]水 居秦故地上下鄣 稍役真番朝鮮蛮夷及燕斉之亡命者王之 都王儉

---

[1] 漢人の呼称は漢代以降であるが，春秋以来の「華夏」の人々の意味で，通時代的に「漢人」の呼称を用いることにする．

[2] 以下，便宜上常用漢字体を使用する．句読点はこれを施さない．和訳がある場合は全て筆者による．

以上は紀元前 195 年の出来事の記述である．盧綰が漢に叛乱を起こしたことで身の危険を感じた衛満は朝鮮風の服装をして鴨緑江を渡り，箕子朝鮮の 40 代王とされる箕準に取り入った後，秦末漢初の動乱時に燕，斉，趙から亡命していた漢人を引き入れ箕子朝鮮国を乗っ取り平壌に首都をおいた．武田幸男(1997)はこうして成立した「衛氏朝鮮」の主要メンバーに「王」，「韓」の 2 つの姓が見え，また姓を持たない現地の首長と思しき者があるところから「衛氏朝鮮」の実体を在地の属国を含んだ連合国家と看做している．

箕子朝鮮は『漢書』(一世紀成書)「地理志」に

殷道衰 箕子去之朝鮮 教其民以礼儀田蚕織作

とあるように殷最後の王，紂のおじとしてその暴政を諫め，周の武王に迎えられ朝鮮に封ぜられた箕子によって開国されたとされる王朝である．武田幸男(1997)は「朝鮮は(中略)遅くとも紀元前四～三世紀には実在していた」(ibid. 264)としつつ「紀元前十世紀のころから後，山東地方の斉に根拠をもつ「箕」族集団が，殷周の権威のもとで燕に服属しながら，朝鮮の西部に接する遼寧地方で活動」しており(ibid. 264)，中でも箕子を先祖とする伝承を持つ「韓」姓の東来と朝鮮半島北西部への定着に言及している．「箕」族集団が漢語話者であったと見る必然性はない．というより，春秋戦国期の「諸族」分布状況から見て，非漢語集団の一つが東来し，その後の漢語化の中で「箕子」を先祖と奉じつつ漢化したものと見る方が自然である．

以上は言語資料ではなく，歴史資料から分かる朝鮮半島の紀元前後までの状況である．秦末漢初までの時期に数多くの漢人が朝鮮半島に到来し，現在の平壌を中心とした地域に漢人を主とするコロニーを形成していたことが見て取れる．

2.2. 漢の直轄地化

前漢の全盛期を迎えた武帝の治世下，衛氏朝鮮国は滅ぼされ朝鮮半島北部は漢帝国の直轄地となる．『史記』「孝武本紀」前 109 年条にある「伐朝鮮」がそれで，翌前 108 年に楽浪，真番，臨屯の三郡を置き，さらに翌年の前 107 年に玄兎郡が設置される．いわゆる「漢四郡」時代の始まりである．ここに朝鮮半島北西部の漢化はかなりの程度進行することになる．特に平壌を中心とした楽浪郡はその後 400 年間中国「内地」として政治的，経済的，文化的中心地となる．中央から派遣された官僚，駐屯軍人，商人，在地漢人，「漢人」化した現地人が城壁で囲まれた城内に居住し，言語，風俗，法令その他全て中国内地の風が行われた．武田幸男(1997: 275)は楽浪古墳群の一つ「楽浪太守掾王光」墓について「郡庁の下役人にすぎなかったかれの墓の豪華さに，息をのむばかりである」としている．また楽浪の王氏が後世の中国でも名の通った名族であったことにも言及している．

以下では漢代の朝鮮半島の言語についての資料を見てみることにする.

2.3. 『方言』の「朝鮮方言」

西暦紀元前後に世界初の方言学書『輶軒使者絶代語釈別国方言』（略称 :『方言』）が漢の揚雄(BC53~AD18)によって著された(晋の郭璞276～324注). 漢帝国を約14の地域に分かち東は朝鮮, 南は南楚(湖南省)に及ぶ. 各地方言の類義語669項目に言及している.「朝鮮」の挙例は27次に及び, 諸方言の中でも多く言及されている. 揚雄は地方に出かけるのではなく首都に住まいしつつ, 公務その他で上京する各地の人々からその母方言を27年にわたって聞き取り『方言』を著したとされる. いわば漢帝国の同時代の各地の方言の記録であり, こうした方言の専論書は例えばローマ帝国では著されなかった.「朝鮮」は「北燕」,「洌水」（大同江）の地名と共に多出する. 以下の如くである（上古音再構形は鄭張尚芳2003による）.

鍑*pug 北燕朝鮮洌水之間或謂之鍈*thɯɯnʔ巻五
罄*qreeŋ. 陳魏宋楚之間曰[兪瓦] 或曰[朱瓦] 燕之東北朝鮮洌水之間謂之瓾*daŋs. 巻五

紀元前後の朝鮮半島の言語の単語の実際の姿を示す同時代資料は『方言』所載の漢代漢語二十数語のみである. 劉君恵(1992)は同書の詳細な検討を通して漢代の方言分区を試み,「朝鮮方言」を「北燕朝鮮方言」という大方言の下位方言と看做している. そして北燕朝鮮方言は燕, 斉一帯の方言と歴史的に密接な関係を持ちつつも前漢時代にはすでに比較的孤立した方言になっていたとする. またこの方言の最古層は殷代の畿内方言と類似しつつも, 一方でこの地域の原住民の語彙を含んでいる可能性についても触れている(ibid. 224). しかしながら,『方言』の朝鮮方言の例を朝鮮語史の観点から検討した研究は管見の限り存在しない.

一方, 上古漢語と朝鮮語の間に関連のある語(対応詞)を見出そうとする試みは近年活発さを増しつつある. 侯玲文(2009)は単行本としてこの問題を扱った研究書の嚆矢であり, 宋兆祥(2011)は後述する借字表記法の字音の問題までをも扱った単行本として侯玲文(2009)に続く達成をなしている.

2.4. 三世紀の朝鮮半島の言語分布

三世紀の東北ユーラシアから日本列島にかけて存在した諸民族, 諸言語の最も信頼し得る資料は『三国志』(西晋・陳寿233-297年撰)魏書巻三十「烏丸鮮卑東夷伝」である. 俗称「魏志倭人伝」もこの中の「倭人」条のことを指す. 河野六郎(1993)はこれについて「通行本」(殿版・百衲本・中華書局本)と『太平御覧』との校堪を行った後, 歴史言語学的観点から考察を加えた研究である. これによれば次の諸民族が確認し得る.

① 漢人，② 東胡(鮮卑と同系，中国東北部)，③ 貊族(夫餘・高句麗・沃沮・濊の 4 つの下位グループに分かれる，中国東北部から朝鮮半島，濊は朝鮮半島東海岸)，④ 韓族(朝鮮半島南部)，⑤ 倭人(日本列島，および朝鮮半島最南部？)，⑥ 州胡(済州島，言語は韓と異なる)，⑦ 挹婁(沿海州からシベリア，言語は夫餘，句麗と異なる)

朝鮮半島と日本列島の諸言語に係るのは，①，③，④，⑤，⑥である．これらのうち，具体的な語形について言及があるものは①，③，④，⑤の 4 言語である．

2.4.1. 漢語

同書「韓」条に次の記述がある．

> 辰韓在馬韓之東 其耆老伝世 自言古之亡人避秦役来適韓国 馬韓割其東界之地与之 有城柵 其言語不与馬韓同 名国為邦 弓為弧 賊為寇 行酒為行觴 相呼為徒 有似秦人 非但燕斉名物也

これらは当時の漢人から見て辰韓の漢語が秦代以前の古い漢語であると看做されたことを記述している．森博通(2011)は「名国爲邦(「国」を「邦」と言う)」が決定的であるとし，漢代以降は漢の高祖劉邦の諱(いみな)を憚って「邦」を「国」と言い換えたため，それ以前の漢語と判断されたとする．ここで思い出されるのが，箕子朝鮮，衛氏朝鮮滅亡後に南に逃げた，「韓」氏をはじめとする漢人たちである．朝鮮半島南部の馬韓東部に，馬韓人(原住民)である「辰王」の支配下に，城郭都市を形成して(一方，馬韓自体は「無城郭」と記述されている)定住していた漢人都市が三世紀にも存在しており，そこでは古風な漢語が話されていたという事実である．後述するが，こうした漢人都市が，新しい渡来漢人を吸収しつつ，半島から列島にかけて七世紀まで存続し続けた事実が厳然と存在する．

2.4.2. 夫餘系言語(高句麗語)

夫餘系の言語を代表する高句麗語は，後に朝鮮半島北半部に高句麗を建国した民族の言語の一つである．また馬韓五十余国のうちの一国「伯斉国」は後に百済を建国するが，百済の支配階級の言語も夫餘系であり，被支配民族の言語は後述する馬韓語という韓系言語であったことは広く知られている(河野六郎 1987 参照)．夫餘・高句麗・沃沮・濊を含め，『三国志』が証言する夫餘系言語の語例は次の高句麗語の 2 例のみである．なお「夫餘系言語」が果たして同一語族に属する言語であったか，多部族・多民族の連合体であった「高句麗」語とされる諸単語が同一言語の語であるのか否かも今日では判然としない．

a. 溝漊者句麗名城也　高句麗語で「城」を「溝漊*koo-g'roo」という.
b. 句麗呼相似爲位　　高句麗語で「似ていること」を「位*G^{w}rɯbs」という.

河野六郎(1993)は上例中 a を唯一例とするが, Beckwith(2007)は上記 2 例に言及している.「城」の高句麗語は後代資料では「忽」と記される. 河野六郎(1993)は「溝漊」＞「忽」に対して, *koro～*kolo＞*kor を, Beckwith(2007)は *kuru(Archaic Koguryo)＞*kuər(Old Koguryo)を再構している. これらは後代の朝鮮語に比定し得る反照形を持たない. 後者の「位」について Beckwith(2007)は Archaic Koguryo の語として *wi: "to resemble", look like' No Japanese cognate has yet been identified. としている. 河野六郎(1993)は後代の高句麗語を含め, 夫餘系高句麗語を「系統不明」とする. Beckwith(2007)は「日−高句麗同系」論者であり, *kuru を日本語「蔵」kura 等と同源とする.

2.4.3. 韓語

韓族は朝鮮半島南部に数多くの「国」を形成していた. 上述のように馬韓五十余国中「伯斉国」が後に半島南西部に夫餘系征服王朝を建て, 辰韓十二国中の「斯盧*se-g'roo」が後の新羅を立てる. 河野六郎(1993)が挙げる韓語の例は「〇〇卑離国」の形で多出する,「集落」を表すと解される「卑離」である.

*piri (三世紀韓語) ＞ *pɯri　夫里 (百済民衆語・馬韓語) ＞ *pɯr　伐 (新羅語)

新羅語で apocope が生じる例は多く, この語もその一つと看做しうる. 上述「斯盧」は後に漢語の音韻変化に伴って「斯羅」と書かれるが, *sira に*pɯr が付いた形が*sirapɯr であり, 新羅語で breaking of *i を起こしたものが syərapɯr (徐羅伐)となり, 新羅(慶州)を指す. syərapɯr (徐羅伐) はまた略されて syəapɯr (徐伐)となり, syəapɯr＞syəəvɯr (十五世紀朝鮮語) ＞ səur (現代朝鮮語, ソウル, 首都)になることは広く知られている. 河野六郎(1993)は夫餘系の百済王族語の「集落・城」を意味する kɨ (己)が*pɯr の代わりに*sira に付いた*sirakɨ が, 日本語の「シラキ$_{乙}$」であるとする(ibid. 20).「城　キ$_{乙}$」が一般語彙として上代日本語に借用され,「midukɨ 水城」,「kɨduku 築く cf. tuka 塚」などに名残を留めている事実は周知の如くである. 図示すれば以下の如くである.

「城邑」を意味する語
三世紀韓語＞韓系百済民衆語＞新羅語
卑離 piri　＞　夫里 pɯri　　＞伐 pɯr

夫餘系百済王族語　　倭語

己 kɨ　　kɨ

倭語における複合語　水城 midu= kɨ,　　築く kɨ=duku ＜　kɨ＋tuku cf. tuka(塚)

「新羅」を意味する語

夫餘系百済王族語　　倭語

*sirakɨ　　sirakɨ　＞ siragi

韓系百済民衆語＞ 新羅語＞ 新羅語＞

*sirapɯri　＞　syərapɯr　＞　syəapɯr

breaking of *i　　syncope

acocope

徐羅伐　　徐伐

＞十五世紀朝鮮語　現代朝鮮語

＞ syə:vɯr　＞　　səur（ソウル，首都）

Ersatzdehnung

ここでは朝鮮半島南部に「韓」と呼ばれた民族が居住し，その言語は現代の朝鮮語に繋がるという事実を確認しておきたい.

なお，この民族名「韓」は漢語であり，先述のように楽浪「韓」氏の冒称である.『魏略』の「冒姓韓」の文言は朝鮮半島では歴史を通して認識されており，十九世紀初に刊行された権文海による百科事典『大東韻府群玉』の「韓」条にも「冒姓韓」が引用されている.「韓」を「偉大な」を意味する韓語形態素とするのは近代国民国家観の過去の歴史への投影による牽強付会である．そもそも漢人は周辺民族に好字を用いることはない(「狄　ケダモノ」,「貊　ムジナの仲間」,「蛮　昆虫や蛇の仲間」参照). 吏読における「大舎＞韓舎」の表記では確かに南豊鉉(2013)の説くように「大＝韓」であるが,「韓舎」ははるか後代の日本資料である．一方，民族自称としての「韓」は漢四郡期に遡り，かつ朝鮮時代でも「冒」りな呼称と認識されていた事実は否定できない.

2.4.4. 倭語

「倭人」条所載の「卑奴母離 *pe-naa-muʔ-rels」,「卑狗 *pe-koo」などが，上代日本語の Finamori ＜*pinamori (鄙守り)，Fiko＜*piko (彦)に繋がることは古くから説かれており，三世紀の日本列島で後代の日本語に繋がる言語が話されていたことは確実である．ただし，日本列島における倭語圏の当時の広がりがどこまでであり，どの程度であったかは不明である．

河野六郎(1993)をはじめ多くの論者がこの時期に朝鮮半島南部に倭語を話す集団が存在したことに言及している．弁辰十二国中の「涜盧国」が「倭」と「接界」しており，弁辰十二国中の「弥烏邪馬国」を*Mi-wa-ya-ma と解している．

本稿では触れないが，『三国史記』(1145 年成書) 地理志所引の朝鮮半島の古地名を形成する語には日本語と共通する数十の語が存在し，新村出博士以来，これらは高句麗語，濊語などと看做されつつ永年に亙って系統論上の問題とされてきた．上述の Beckwith (2007)もそうした流れの中の日−高句麗語同系論である．

『三国志』所載の語彙中，日本語との関係が問題となるのは「牟盧 *mu-g’roo」である．「咨離牟盧国」,「牟盧卑離国」などに現れる．兪昌均(1983)，南豊鉉(2009)に述べられるように，これは後代「牟羅」として現れ,「村落」を意味する一般名詞となる．南豊鉉(2009)によれば，1988 年発見の「蔚州鳳坪新羅碑」(524 年)の「居伐牟羅」の例,『梁書』(七世紀成書)「新羅伝」に新羅では「城」を「建牟羅」というとする記載，また「耽牟羅＞耽羅」の例から済州島を含む「韓語」の「村」を現す語として三国時代に使用されたとする．

しかし，上記の諸論が論じていない点が 3 点ある．

① 三世紀の「牟盧*mu-g’roo」は倭王権が朝鮮半島南部に影響力を行使するよりも以前の「倭語」地名と看做し得る．地名学(toponymy)や水名学(hydronomy)の教えるところによれば河川名を含む地名は先住民族のそれを襲うことが多い．

② 牟盧は *mura と再構されるが, 韓語としては解釈され得ず,「wosu(統治する) : wosa(長)」,「naFu（綯う）: naFa(縄)」,「turu(連れる) : tura(列)」,「tamu(廻める) tama（玉）」のような，用言語幹末母音の-u～-a 交替による「muru(群れる)」の「情態言」と解し得ること．

③しかしながら『類聚名義抄』の村のアクセント(HL)と「牟羅」の古韓音の声調の推定調値(平平 : LL)と合わない．

「牟盧＞牟羅」については稿を改めて論じたいが，倭語の話し手が日本列島に行ききってしまう以前に朝鮮半島に残してきた倭語の残滓と看做し得る可能性を考えている．なお，現代朝鮮語の maɯr (村)は古代朝鮮語 *mʌzʌrk に遡及し，倭語 mura とは一切関係のない語である．なお，十五世紀朝鮮語には「群れ」を意味する mur (去 H)が存在するが，派生接辞*{-a}の存在

は朝鮮語史において確認されていない.

2.4.5. 三世紀言語状況のまとめ

以上を要約すれば以下の通りである.

① 朝鮮半島西部の楽浪，帯方郡以外にも各地に漢語話者が都市を形成して居住していた．このうち馬韓東部，恐らくは洛東江流域の漢人都市の言語は楽浪郡のそれよりも古風な漢語であった.

② 半島中北部，東部には夫餘系諸語が話されていたが，夫餘系諸語が同一語族に属するかも判然とせず，それら諸言語の系統も不明である.

③ 半島南部には韓系言語が話されており，これは今日の朝鮮語に繋がる.

④ 日本列島には倭語が話されており，これは今日の日本語に繋がる.

⑤ 倭語は朝鮮半島南部でも話されていた可能性がある.

2.4.6. 遊牧国家の諸言語との関係

杉山正明(2011)は漢の武帝による朝鮮経営の理由として朝鮮が漢より先に匈奴帝国の影響下にあったこと，匈奴の「左賢王・右賢王」の用語が五世紀の百済でも使用されていた事実に触れている．アルタイ諸語と朝鮮語の比較研究は Ramstedt(1954, 1982)，それを引き継ぐ Poppe(1960)を始めとして汗牛充棟である．しかし，近年の中央アジア史研究でアルタイ諸語の語形に比定された匈奴，東胡，鮮卑，烏丸，柔然，契丹その他の固有名詞，役職名等について，朝鮮語史の観点からも見てみる必要がある.

2.5. 朝鮮半島，日本列島の漢人たち

紀元前 108 年に楽浪・真番，臨屯郡の三郡が，翌 BC107 年に玄兎郡が設置され「漢四郡」の時代が始まる．BC82 年には真番，臨屯の二郡が廃止され，玄兎郡は二度に亙って西方に移される．AD204 年に公孫氏が楽浪郡の南に帯方郡を設置し，238 年魏が公孫氏を倒し，楽浪，帯方の二郡を接収する(卑弥呼の遣使はその翌年である)．この後，高句麗が 313 年，314 年に楽浪，帯方の二郡を滅ぼすまで，朝鮮半島中西部，西北部は中国の直轄地である.

漢人の東渡は，前述の難民としての移住，平時の移住，郡への赴任などさまざまな理由が考え得るが，最大のそれは交易である．郡の外には，夫餘，高句麗，沃沮，濊，倭，州胡などさまざまな漢化していない原住民と亡命漢人が小集団を成して住んでいるが，彼らと郡との関係は交易と政治の両面の要素を持つ.

交易に関して言えば，後漢の許慎の『説文解字』(100-121 年成書)に，多くの魚介加工品が「楽

浪藩国に出づ」として載せられていることを武田幸男(1997)が指摘している．恐らくは濊を介して楽浪に届けられた特産の食品が漢帝国の首都に流通している事実を示唆している．朝鮮半島のみならず，人口の多い倭地域も重要な交易の相手であり，諸族の首長は中国貿易の窓口を独占するために「朝貢」を行う．『後漢書』「倭」条の「使駅通於漢者三十諸国　国皆称王」も漢との交易関係を持つ倭の諸国が三十余りあったということであり，AD57 年に光武帝から印綬を賜った奴国もそうした諸国の大なるものである．こうした原住民の諸国にはそれぞれ漢人のアドヴァイザーが複数存在し，郡への取次ぎ，「使駅→使訳」すなわち通訳業務から，プロトコルに合わせた儀仗，文書作成，朝貢のタイミングの見計らい等一切を請け負っていたと考えるほかない．

政治的側面について言えば，中国の公認を受け，その威信財を下賜されることにより，それら威信財を周辺の諸「国」に再配分することによって周囲への優位を示すことが可能になる．高句麗が古くから「朝服衣幘」を，諸韓，諸倭，濊も衣服を始めとする威信財を下賜された事実が記録に見られる．卑弥呼も「好き物」を多く賜ったことは知られる通りである．郡と韓，倭，濊の関係はいつも平穏とは限らない．漢代にも韓濊の反抗は見え，魏の楽浪，帯方接収以降の三世紀中頃，韓の一国である臣濆活国が中心となった韓の反乱では帯方太守が戦死するに至っている．しかし紀元一世紀から王莽の新，漢と戦争を含む激烈な国際関係を織り成していた高句麗と比べると，韓，倭，濊と中国王朝の関係は多様ではない．この時期までの対中国通交に，高句麗語，韓語，濊語，倭語の話者であったであろう諸国の王宮の現地首長層が自ら漢語を書いて漢語を用いていたとする，積極的証拠は存在しない．

314 年の帯方郡滅亡以後，半島と列島の漢人は政治的に本国から切り離される．しかしこの後も半島から列島に漢語話者集団が存在しつづけ，帯方郡滅亡直後の西晋滅亡，その後の五胡十六国の乱を避けて半島と列島に渡来した新来漢人によって上書きされつつ，さまざまな地域的時代的変種を含む漢語話者集団が少なくとも七世紀まで存在した．

辰韓のアルカイックな漢語についてはすでに触れたので，ここでは『隋書』(七世紀成書)の記載を見よう．

方有十郡 郡有将 其人雑有新羅 高麗 倭等 亦有中国人　「百済」条
其人雑有華夏 高麗 百済之属　「新羅」条
又至竹斯国 又東至秦王国 其人同於華夏　「倭国」条

六世紀の半島と列島の諸族の分布が語られている．

① 百済の各郡には新羅人，高麗人，倭人，中国人が雑居している．

② 新羅には中国人，高麗人，百済人が雑居している．
③ 筑紫の東，難波以前の地に「秦王国」があり，そこの住民は中国人である．

③は隋使の斐(世)清の見聞であり，七世紀初頭の日本列島の同時代的記録である．

ここで少し漢人のことを離れ，四世紀から七世紀の朝鮮半島と日本列島の漢人以外の住民分布について考えてみよう．日本列島には倭人が，伽耶，百済，新羅地域には韓人と濊人が住民の主要構成要素であり，百済の王族は夫餘系言語を話していた．高句麗語と濊語は実体を知り得ない．

しかし，上述 2.6.の①，②から知られるように，百済地域にも新羅人，高麗人，倭人が雑居し，新羅地域にも高麗人，百済人が雑居していた．近年発見され，現在十三基確認されている全羅南道栄山江流域の五世紀末～六世紀前半の前方後円墳からも確認し得るように朝鮮半島南西部には倭系豪族が居住していた．

一方，田中史生(2005)，吉村武彦(2010)が考古学の成果を引きつつ明確に述べるように，五世紀初頭以後，伽耶地域から近畿地方への技術者の大量の渡来が認められ，日本列島内に多くの韓系住民が存在したことも確実である．累次にわたるいわゆる「渡来人」についてはここであらためて触れることをしないが，伽耶，百済，新羅の韓人の他，殊に六世紀以降の百済からの仏教導入，その後 663 年の白村江敗戦以降の百済王族・貴族の倭への亡命による夫餘系百済語話者の流入，同様に高句麗の言語の話者の受け入れなどから見て，七世紀末の日本列島も倭，韓，夫餘系百済語，「高句麗語」話者集団の混住する地域であったという点で朝鮮半島と同様であった．

白村江敗戦から 100 年を経た八世紀後半にも日本列島が多言語であった証左として 761 年に美濃と武蔵の少年各 20 人に新羅語の学習を命じた事実を挙げ得る(『続日本紀』巻二十三，天平宝字五年正月乙未条)．美濃も武蔵も新羅人の入植地であり，武蔵ではこの直前に「新羅郡」が新設されている(因みにこの時期の武蔵国守高麗福信は武蔵国高麗郷を形成するに至る高句麗王族である)．学ばせられる少年達は当然新羅語を解さなかったであろうが，それでも他の人々に比して新羅語が学びやすいであろうと考えられる程度に新羅語の痕跡があったことの証左ではないかと考えられる．記録には新羅語を教える教師についての言及がないが(812 年の越中国における渤海語学習に関しては教師名の高多仏，帰化後高庭高雄が伝わっている)，大宰府から新羅訳語を派遣するのではなく新羅語を話す郷内の父老から学ばせようとしたものと考えられる．なお，律令政府はこの後も新羅からの移民(帰化)を受け入れ続け，842 年 8 月 15 日に新規の新羅人の帰化を一切認めなくなるまで断続的に新羅語話者のニューカマーが九世紀半ばまで列島に移住して来ていた．

ここで東夷諸国の王宮の言語を見てみよう．

百済の宮廷に関しては，『周書』(七世紀成書)「異域伝百済」条に

王姓夫余氏 号於羅瑕 民呼為鞬吉支 夏言並王也 妻号於陸 夏言妃也

『日本書紀』古訓では「王」を「コニキシ」，「オリコケ」「夫人」を「オルク～オリク」と訓む．万に一つともいうべき偶然によって知り得る日中の記録から百済では

	王族語	民衆語
王	於羅瑕・オリコケ	鞬吉支・コニキシ
妃	於陸・オルク～オリク	

と称していたことが分かる．民衆語の「鞬吉支・コニキシ」は後代の韓語の k^{h}in kɨicʌ (大王)で解し得るが，王を「於羅瑕・オリコケ」，妃を「於陸・オルク～オリク」と呼んだ「夫餘系」百済王族語は如何なる系統に属する言語であったのか今日では全く知り得ない．

倭の宮廷に関しては，『隋書』

倭王…号阿輩鶏弥…妻号鶏弥…名太子為利歌弥多弗利

の「阿輩鶏弥」，「鶏弥」，「利歌弥多弗利」がそれぞれ倭語の「オホキミ」，「キミ」，「ワカミトホリ」に比定し得ることからも倭語を用いていたことが明らかである．新羅王宮についてはここに詳述しないが百済民衆と同じ韓系言語を用いていた．

3. 朝鮮半島における漢語，漢字の受容

3.1. 漢人から現地人へ

「朝鮮半島における漢語，漢字の受容」というと，「漢語，漢字」が朝鮮半島にやって来たように受け取られがちだが，事実は，先ず「漢人が来た」のである．

漢人は「読書音」と「書字」の伝統を伝承する．2.6.で述べたように中国諸王朝との外交実務を担当したのは朝鮮半島，日本列島内に居住する漢人であったと考えられる．武田幸男(1989)，李成市(1998)，田中史生(2005)も，帯方郡滅亡後に東夷諸国に流入した漢人が晋朝回復志向を持ちつつ外交文書作成に携った可能性について述べている．漢人集団は何度もわたって東来し，新しい字音，新しい漢語知識を上書きしていったが，先秦あるいは漢代，魏晋代以来朝鮮半島に北回りでもたらされた漢語の古層もまた消し去れることなく残存していたと考えられる．

外交実務のみならず，各地域の王権の成長とともにそれぞれの地域での威信財の銘文作成にもこれらの漢人が関与するようになる．

日本列島で 5 世紀半ば以降に作成された千葉県稲荷台出土「王賜」鉄剣銘，稲荷山古墳出土鉄剣銘(471 年)，同時期の江田船山古墳出土鉄剣銘もその銘文は漢人によって書かれたであろう(田中史生 2005 参照)．外的証拠は江田船山古墳出土鉄剣銘の「書者張安也」であり，内的証拠は森博通(2003)が明らかにした稲荷山古墳出土鉄剣銘の「古韓音」声調による倭国語アクセントの書き分けである．比垝ヒコ(上上 : HH)，足尼スクネ(入平 : LLL)，獲居ワケ(入平 : LL)，獲加多支鹵ワカタケル(入平平平上 : LLLLH)の声調が倭国語のアクセントと完全に一致している．「古韓音」はある意味で当然のことながらその後の呉音，漢音同様厳密な声調の別をもって使用されていたと考えられるのである．

「古音」，「古韓音」，「推古朝遺文の漢字音」，Archaic Northeastern Middle Chinese(Beckwith2007)と称される漢字音は，中古音を母胎とする呉音，漢音よりも古い時代に朝鮮半島を経て倭国に伝えられた漢字音である．現代日本語に繋がる例を 2 つだけ記せば次の通りである．

漢字	中古音	呉音	漢音	古韓音	仮名
止	tśi̯i	シ	シ	tjɯ ＞ tö	とト
乃	nâi	ナイ	ダイ	nɯɯʔ＞ nö	のノ

今日の日本語話者の用いる「と，ト」，「の，ノ」の仮名の音は，楽浪，帯方郡以来，北回りで朝鮮半島に伝えられさらに倭国に伝えられた古音の名残であり，六世紀以降百済経由で南朝からもたらされた呉音や，唐代長安から直接日本にもたらされた漢音の系統をひくものではない．

外交文書や威信財銘文作成には漢人の手を借りることは可能であるが，国内行政用に漢字を使用するためには現地人の漢字漢語学習が必要となってくる．高句麗が王族や貴族の子弟教育のための「太学」を設置するのは 372 年である．556 年と推定される「高句麗城壁石刻銘」は後述するように萌芽的な吏読文であり，工事の担当者，監督者の達成の覚書であり，国内用行政文書と看做し得る．現地人の漢字漢語学習における漢字音は，理想的には漢語本来の音に近く発音されることが要請された．漢語本来の音（時代によって理想とされる音は変わる）が学習されるべきであるという姿勢は日本では九世紀まで確認される．伊藤英人(2004a)で述べたように『続日本紀』巻十五承和十二(845)年二月丁酉条の明経道教授善道真貞(よしみちのみちさだ)死亡に言及した箇所で彼の漢語の音が

但旧来不学漢音　不弁字之四声　至於教授　惣用世俗踏訛之音耳

で，律令国家で正統とされた漢音でなかったことが特記されている事実からも確認し得る．

しかし実際において，朝鮮半島，日本列島の現地学習者はそれぞれの土地の「世俗踏訛之音」

を用いざるを得なかったこともまた事実である.

比較的近年発掘された飛鳥池遺跡出土の字書木簡(八世紀初)に

熊　[汙吾]　蜚　[皮伊]

のような万葉仮名で日本式の漢字音が記されている例がある．また，開元七(719)年新羅甘山寺阿弥陀仏および弥勒像光背銘の作者が

金志誠　(阿弥陀仏光背銘)
金志全　(弥勒陀仏光背銘)

のような表記のゆれを見せることについて河野六郎(1957/1980)は「誠は syəŋ，全は jyən で，s と j の混同，n と ng の混同を平気で示している」と指摘している．三国時代の朝鮮半島，倭国時代の日本列島の漢字音については正確なところははっきりしていないが，上述のように現地人の漢字漢語使用に伴う不完全な発音と，古音の残存が確認され，なかんづく後者は三国時代の朝鮮半島経由の字音を今日の仮名にまで保っていることを確認しておきたい.

3.2. 韓習，倭習の発生

ここからが本稿の中心をなす．漢語と漢字を学習しはじめた高句麗の支配層と官吏は，国内行政に漢字を用いるようになる．その最初の例が上述の「高句麗城壁石刻銘」である．556 年と推定される碑文の冒頭を鮎貝房之進(1934)，南豊鉉(2000)の釈文と共に示せば以下の通りである.

丙戌十二月中　漢城下　後ア小兄文達　自此西北行涉之
丙戌年の十二月中に漢城下の後部出身の小兄である文達が(監督した)．ここから西北の方を受け持った.

「十二月中」の「～月中」は 1978 年の稲荷山古墳出土鉄剣銘の「七月中」と絡めて漢文の韓国的用法(韓習)ではないかとの議論が盛んに行われたが，現在では否定されており南豊鉉(2000)もこれを吏読と認めていない．李成市(2002)は「部」の省文「ア」が 1995 年に発見された「百済扶余宮南池木簡」(634 年～660 年)に「西ア(西部)」として見え，「部＝ア」が高句麗から伝えられたことについて述べている. また小林芳規(2005)は日本の島根県松江市大庭町岡田山一号古墳出土環刀太刀銀象嵌銘(六世紀後半)に「各田ア＝額田部」に現れることを指摘している．このような高句麗に由来する漢字の省文が倭や百済に伝えられた事実は近年の出土木簡資料によって確認されつつある．なお「各田ア＝額田部」は「訓読み」漢字の日本列島における初出例で

ある．この「ア」は後代，平仮名，片仮名の「へ，ヘ」の字源となる．

「高句麗城壁石刻銘」に 100 年先行する(五世紀前半)の高句麗金石文資料が 1978 年に韓国忠州で発見されている．「中原高句麗碑」である．高句麗の石碑と言えば「広開土王碑」(414 年)が有名であるが，それは李成市(2002)の述べるように純然たる漢文で書かれている．これに対して同時期の「中原高句麗碑」は高句麗が支配下に置いた新羅人への通知文であり，純粋漢文からは逸脱した漢字列が認められる．

太位諸位上下　衣服来受教　跪営之

太位と諸位の上下は衣服を受け取りに来いといわれて営に跪いた(南豊鉉 2005)

「衣服来受教」の語順は明らかに漢語のそれと異なる．文末の「之」も初期吏読で常に問題となる文字である．

李成市(2002, 2007)は高句麗において本来の漢語とは異なる漢字使用が先に開発され，新羅は高句麗の影響下で漢字使用を始めたのであって，中国から直接に漢語，漢字文化を受け入れたのではないことを強調している．高句麗において開発された本来の漢語とは異なる漢字使用が倭国にもたらされたことについても李成市(2002)，田中史生(2005)は 572 年に百済からの渡来人である王辰爾が既存のフミヒトが解読できなかった高句麗の国書を解読したことについて，それが高句麗式の「俗漢文」で書かれていたため半島からの新規の渡来人である王辰爾には解読できたが，その用法に習熟していないオールドカマーの漢人たちには読めなかった故事に基づくとしている．田中史生(2005)はさらに王仁，王辰爾など倭国に漢字文化を伝えたとされる人々が中国系「王」姓の者であることに注目している．

倭国における倭習の例は法隆寺金銅薬師仏光背銘(607 年)が有名である．小谷博泰(2006)の訓み下しと共に冒頭部分を示す．

池辺大宮治天下天皇大御身労賜時

池辺の大宮に天下治めたまひし天皇(すめらみこと)大御身労(つか)らし賜ひし時

恐らくは「たまふ」という助動詞を表記したと考えられる「賜」の用法などから「和文」表記の初例とされてきた．中原高句麗碑からは 200 年近い時間を経ているが，高句麗にその淵源を持つ変則漢文の流れの中で成長してきた「漢字による東夷諸語表記」の後代の例である．5 世紀以降の朝鮮半島の「韓習」の例を追うことで，日本語表記の起源を以下で見ていくことにする．

4. 朝鮮半島における漢字による自言語表記

李成市(2002)は「高句麗を経由して漢字文化を受容した新羅では，それらを基本としながらも独自の文字文化を形成するための試行錯誤があったものと推測される」と述べているが，高句麗の金石文，百済の金石文，出土木簡と比べても，新羅の漢字使用は一種異様である．李成市(2002)は「迎日冷水新羅碑」(503 年)，「蔚珍鳳坪新羅碑」(524 年)，「丹陽赤城新羅碑」(545 年＋α)にいずれも高句麗以来の文体が認められるとしている．

1989 年に慶尚北道迎日郡冷水里で発見された「迎日冷水新羅碑」（503 年）には「王命」を意味する「教」を句末に反復する用法が見られる．1988 年に発見された「蔚珍鳳坪里新羅碑」(524 年)には

若此省皆罪於天
もしこれを省いたら天に罰せられる

という文が見られる．「此省」は目的語が前置された例であると考えられる南豊鉉 2000）．1978 年発見の「丹陽赤城新羅碑」(545 年＋α)には

更赤城烟去
さらに赤城烟に行き

合五人之
全部で五人である

のように漢語の語法を無視した例が見られる．

近年発見された「慶州垓字木簡」の年代は 7 世紀前半と推定される．

大烏知郎足下万拝白々／経中入用思白不雖紙一二斤／牒垂賜教在之　後事者命尽／使内

市大樹(2012)の解読によれば

大烏知郎の足下で常に拝んで，次のようにお願い申し上げます．経で必要となる紙を，たとえ白紙でなくてもよいので，一二斤買いなさい，という牒を垂れ賜えという命令がありました．後のことは命令の意を十分に察した上で処理して下さい．

「経中入用」の「中」は明らかな吏読の初出と考えられる．「中」は朝鮮時代には ahʌi と読まれ処格（於～）を表す．「使内」は pʌri と読み，「処理する」の意味の吏読として 19 世紀まで用いられた．

韓習漢文の極限は「壬申誓記石」(552 年あるいは 612 年)である．冒頭部分を李成市(2002)の試訳と共に示す.

壬申年六月一六日二人并誓記天前誓今自／三年以後忠道執持過失无誓若此事失天大罪得誓
壬申年六月一六日に二人并(なら)びて誓い記す．天の前に誓い，今自(よ)り三年以後，忠道を執持し，過失无(な)きを誓い，若し此の事失えば天に大罪を得んことを誓い

漢字列と日本語訳を比較してみればこの漢字列は日本語と同じ語順で並べられていることが分かる．これから知り得ることは新羅語が現代朝鮮語と同じ語順であったこと，新羅語の語順に合わせて漢字を並べる表記法が新羅で完成していたことである.

ただ，この資料はそれがどのように発音され読まれたかを知る手がかりは全くない．こした表記法を朝鮮語学で「誓記体」という.

年代が確実な，明らかに新羅語部分をも表記した例は「南山新城碑」(591 年)が最初である．河野六郎(1957/1980)の解読と南豊鉉(2000)の釈文からその冒頭部分と和訳を示す. 下線部が新羅語を表記したと考えられる部分である

辛亥年二月廿六日南山新城作節如法以作後三年崩破者罪教事為聞教令誓事之
辛亥年二月廿六日，南山新城(を)作るとき如法で作る．後三年(以内に)崩破したら罪とすることにして奏聞せよとの教令に従って誓う事

「以」は ro(～で),「者」は in(～は, ～ば)と読まれたであろうとすることは河野六郎(1957/1980)と南豊鉉(2000)に共通する．法隆寺金銅薬師物光背銘の「賜」と同様，万葉仮名表記でないため正確な音価は不明だが，法隆寺金銅薬師物光背銘が「和文表記」の嚆矢であるならば，それにやや先立つ南山新城碑は「韓文表記」の嚆矢であると言えよう.

漢字による新羅語表記が全面的に展開するのは 676 年の新羅による朝鮮半島統一以降（統一新羅）の時代である.

「新羅華厳経写経造成記」(755 年)の一部と和訳を南豊鉉(2000)によって示す.

第二法界一切衆生皆成仏欲為賜以成賜乎
第二に法界の一切衆生がみな成仏したいとなさることで作ったのだ

「成仏欲」の「欲」は-koa-（～しようとする)，「為」は hʌ-(する)，「賜」は尊敬語幹形成接辞 -sʌ-(～れる/られる)，「以」は具格 -ro，「成」は ir- (作る) ，「乎」は -on(～すること)を表す.

記録されたのは十三世紀末という新しい時代であるが一然著『三国遺事』は八世紀以前の郷歌十三首が記録されている．郷歌は「郷札」という漢字による新羅語表記法によって記録され

ている．統一新羅孝昭王代(692-702)の歌とされる「慕竹旨郎歌」の冒頭部分を金完鎮(1980)の解読と共に示す.

去隠春皆理米
kan pom motorimai
去った春は戻れぬであろうゆえ

「去」は動詞語幹 ka-(去る),「隠」は音仮名 in(～した),「春」は訓読み,「皆」は訓読みして moto(みな)と読み，同音の mot o-(来ることが出来ない)に宛てる．ちょうど日本の万葉仮名で詠嘆の終助詞「かも」に「鴨」を宛てるような用法である．「理米」は音仮名で rimai(～であろうゆえ)を表記している.

まさに日本の万葉集と同時代の新羅歌謡(八世紀以前の歌十三首，九世紀の歌一首)が，その分量において大きな差は存在するものの遺されているのは大きな意味を持つ.

なお，日本国字と考えられてきたものが実は朝鮮半島で作られたものであることが判明した例として次の資料を挙げ得る.

2008 年に全羅南道羅州伏岩里で出土した 7 世紀初の百済木簡に

畠一形得六十二石

とあり，「畠」が日本国字とは言いきれないことが知られるに至った.

5.以下で新羅以降の中国化と対抗中国化について述べるに先立ち，ここまでの流れをまとめておきたい.

① 五世紀以降，高句麗において高句麗語の干渉による変則的な漢字漢文使用が始まった.
② それは百済，新羅，倭などの東夷諸国に伝えられ各地で同様の試みがなされた.
③ 変則的な漢文を大きく逸脱して自言語表記に漢字列を大胆に用いたのが新羅と倭であった.

660 年に百済は滅亡し，663 年の白村江の戦いで倭は新羅，唐を敵に回して完敗してしまう．当時の認識としては全世界を敵に回してしまった倭は，中国大陸，朝鮮半島とは全く無縁に「国生み」がなされたという建国神話の創出，「天皇」号の確立と「日本」という新設国家の立ち上げを断行し，律令による域内の統一を図る．七世紀末まで，さまざまな漢語諸方言，百済王族貴族の大量亡命による夫餘系百済語，伽耶，百済，新羅の韓語諸語，倭語，アイヌ語などの諸言語がモザイク状に並存していた日本列島は急速に倭語化していったものと考えられる(上述の 761 年の武蔵国少年の新羅語学習が新羅系住民の母語喪失の傍証となろう)．同様に 676 年の

新羅による朝鮮半島統一以降，朝鮮半島も急速に新羅語化が進行したと考えられる(李基文 1998)．そこでは中国とは異なる「国語」による詩歌集の編纂が領域内統合の手段として採用された．したがって次の一項を加え得る．

④ 統一新羅，律令制日本において漢字による自「国語」表記により詩歌が記録された．

今日では散逸して伝わらないが，888 年に郷歌を集成した『三代目』が編纂されている．『三国遺事』の十四首に加えてこの書が伝えられていたならば『万葉集』とのさまざまな比較が可能であったはずである．
以下では統一新羅以降の中国化と対抗中国化について見てみることにする．

5. 統一新羅以降の中国化と対抗中国化

5.1. 統一新羅の中国化

唐が安東都護府と熊津都護府を遼東に移し，新羅の朝鮮半島統一が完了した 669 年以降，新羅は唐の模範的外藩として自らの中国化を推し進めた．朝鮮半島の中国化はこれ以降二十世紀初に至るまで次第に強度を増しつつ継続する．実際には朝鮮半島が純粋漢民族王朝の朝貢国であった時期は宋朝の 963 年から 1125 年，明朝の 1393 年から 1627 年を合計しても 400 年に満たない年月であり，944 年から 1126 年の遼(契丹)，1126 年からの金，十三世紀からの元，1627 年からの女真（後金，清），北朝とそれ以前の匈奴を含めれば，朝鮮史の大半はアルタイ系王朝に服属していたと言える．特に大元 ulus の kürgen(花婿)として皇女の降嫁を受け，「モンゴル」の扱いを受けた高麗の王は大都(北京)でモンゴル人の母の元でモンゴル語によって名づけられ(例 : 忠穆王，在位 1344-1348 モンゴル名 pad ma rdo rje)，モンゴル語，漢語を母語として育ち帰国して高麗王として即位した．王のみならず貴族もモンゴル名をもった．大都にはモンゴル風の髪型と服装をした高麗人が数多く住み，彼らのモンゴル貴族風の生活案内語学書の『朴通事』や 1998 年に元代版が発見された『老乞大』にも，世界化に巻き込まれた高麗人の朝鮮半島と大陸での活動の様子が伝えられている．高麗の首都開城には色目人が饅頭屋を開き，元在住の高麗人の中にはムスリムになる者まで現れた(アラー・アッディーン，ラマダーン父子)．特に高麗女性は大都にその数が多く，遠くインド等へ嫁する高麗女性もいた．高麗王妃と共に高麗に乗り込んだ従臣にはモンゴル人の印侯，ムスリムの張舜龍，タングート人の盧英等がおり，高麗宮廷での公用語もモンゴル語，漢語であったと考えられる．麗末鮮初には，ウイグル王国の財務大臣に祖先を持つ偰氏が帰化し，慶州偰氏として朝鮮時代に至るまで人材を輩出した．高麗王室に伝えられたチベット仏教の影響も見逃しがたい(松広寺にはチベット語文書も伝わっている)．

したがって朝鮮半島を「中国化」一色，まして「中国化＝漢化」の等式のままに認識することは朝鮮半島と大陸の真の関係を見誤らせることにも成り得る．

しかしながら朝鮮半島の知識層の「意識」の中では，アルタイ志向などは微塵もなく，「漢民族」の文化，中華文明のみが希求された．安全保障のため，朝鮮時代には，漢語，モンゴル語，満州語，日本語の通訳養成機関が設置され，十九世紀までこれらの四言語の学習が続けられたが(日本語セクションは琉球語の研究もしている)，朝鮮史を通じて，近代以前の朝鮮半島の知識人が，知的目的からモンゴル語，満州語，日本語や他言語の原書を読もうとすることは一度もなかった．自国語の書ですら読もうとせず，朝鮮半島の知識人は漢文世界のみに棲息した．その中華志向性は時代が下るにつれて強度と先鋭化を強めていく．

新羅の仕えた唐朝の王室が，自らの父母の家系をどのように遡ってもアルタイ系に行き着いてしまうがゆえに，しきりに自らの出自を隠したがったことに加え，アルタイ系王朝のくびきに繋がれる時期が長かった故にこそ朝鮮は自らの中華性を矜持のよりどころにしようとしたのだとの見方も成立し得よう．

新羅は景徳王代に国内地名を漢語に置き換えた(757 年前後)．日本においても 713 年に国郡名を「好字二字」に置き換えており，八世紀の新羅と日本で地名の中国化が進められたことは興味深い．日本のそれが訓読みを含む不徹底なものであったのに対して，新羅のそれは全面的な漢語式への転換であった．『三国史記』(1145 年成書)三十五巻を中心に記録された改正前と改正後の地名の対比から古代語の語形が復元され得るのである．前述した，日本語とよく似た「高句麗地名」も全てがこの時の改正の記録によるものである．

兎山郡　本高句麗烏斯含達　景徳王改名　今因之　(三国史記三十五)
兎山郡はもともと高句麗の「烏斯含達」で景徳王の時に兎山郡に改名した．

「兎」を意味する高句麗地名要素「烏斯含」と「山」を意味する高句麗地名要素「達」から Beckwith(2007)は高句麗語形態素 *usiɣam(兎)，*tar(山)を再構している．百済，高句麗の故地を含む朝鮮半島の地名が漢語化されてしまうことにより三国時代以来伝承されてきた古地名は消滅していった．

ほぼ同じ時期に新羅は人名も漢人化する．今日の朝鮮半島の姓のうち「朴」を除く全ての姓が漢民族と共通であるのもこの時期の改正の結果である．姓でなく名の方は，庶民の場合，固有語の名前が十五世紀にはハングル表記され，日本の植民地期まで及ぶが，知識層の姓名は統一新羅時代には全て漢化された．

日本においても姓の漢人化は行われた．源平藤橘の一字姓は漢人化の一例である．[3]

5.2. 統一新羅の対抗中国化

5.2.1. 漢文訓読法の発明と片仮名の使用

『三国史記』巻四十六の薛聡伝に次の記載がある．

以方言読九経　訓導後生　至今学者宗之

薛聡は新羅華厳宗の高僧元暁(617-686)の還俗後の子である．「薛聡が方言(新羅語)で儒教の経典を読んで若者を教育した．今に至るまで学者はこれを手本としている」という意味に解される．新羅語で漢文を読むとは，すなわち日本における漢文訓読が新羅に存在したことを示す．

今日，朝鮮半島に漢文訓読は存在しない．漢文は朝鮮漢字音で頭から直読され，間に朝鮮語の助詞を挿んで音読される．例えば次の通りである．

子曰学而時習之 miən　不亦説乎 a　有朋自遠方来 miən　不亦楽乎 a

「miən ～ならば」，「a ～か」以外の部分は朝鮮漢字音で直読される．日本のように上下転倒していきなり日本古語に和訳して読むという習慣は存在しない．このため 1970 年代中盤まで，漢文訓読は日本独自のものと考えられてきた．

まず，漢文訓読とは何かということを考えてみたい．第一に「漢字の訓読み」と「漢文訓読」は違うということ，そして前者が後者の前提となることを確認しておこう．以下，分かりやすく日本語の例を単純化して考えてみよう．

漢語，漢字，漢文が漢人とともにやって来た時，当然のことながら，外国語として正しい発音で頭から読んでいって理解したはずである．今日の我々が英語や中国語を学ぶのと同じである．正しい中国音による音読は平安中期まで学習された．

一方で倭語＝日本語話者である現地人学習者は，内容理解のために各語（各字）の意味に相当する倭語を宛てて理解しようとする．「山」の字音は ṣǎn[1] だが「意味」は倭語の「やま」であ

[3] 杉山正明(2011)は「源」姓について興味深い指摘をしている．拓跋氏の北魏(王室の漢姓は「元」)がやはり拓跋系の禿髪(＝拓跋)氏に「元」と通じる「源」氏を賜姓した故事に言及し，嵯峨天皇が 814 年に皇子，皇女の臣籍降下に際して「源」氏を賜姓する際，北魏の「源」氏賜姓を知らずに行ったとは考えにくいとしつつ次のように指摘する．「嵯峨源氏の場合，有名な人物では源信(まこと)，源融(とおる)，源挙(こぞる)，源順(したごう)など，一字姓だけでなく一字名である．(中略) 率直にいって，漢風の名のりといってさしつかえないだろう．唐朝や新羅・渤海との対応にも，単姓でも十分なうえ，さらに徹底して単名ならば，文句なく「国際人」であろう．(ibid. 266-273) 新羅以降，中国式の姓が定着した朝鮮半島とは異なり，日本列島では中国式の姓は定着することなく(対中国外交時に，足利，徳川が源姓を，豊臣が平姓を名乗るなどを例外として)地名，官職名等さまざまな起源に由来する「名字」という非中国的な名づけが定着する．

る．もちろん漢語と倭語は別の言語であるため，それぞれの語の意味領域は異なる．しかし代表的な「訓」を宛てておくことによって各「字」の「定訓」が発生する．前述した島根県松江市大庭町岡山一号古墳出土環刀太刀銀象嵌銘(六世紀後半)の「各田ア＝額田部」の例では「額ぬか」，「田た」，「部べ」の訓読みが確認される．浄御原時代(672-694)と推定される北大津遺跡出土の音義木簡には「賛 田須久 たすく」の訓読みが見られるが「田」は訓仮名として用いられている．つまり「田」の字に d’(i)en[1] の他に「タ」という読み方が生じた段階を示している．

漢文訓読は漢語の原文を倭語の定訓を借りつつ語順までをも転倒させていきなり倭語で読む方法である．現在のところ遅くとも七世紀の日本列島では漢文訓読が行われていたことが知られている．北大津遺跡出土の音義木簡の「[言至]　阿佐ム加ム移母　アザムカムヤモ」は定訓でなく漢文訓読の一部を記したものと考えられている．平安中期以降，漢籍は専ら訓読によって学ばれることになった（仏典においては，解釈は訓読によるものの経典音読の伝統が宗派ごとに字音を異にして伝承された）．

訓読は「訓点」によって示された．訓点は，墨書，朱書，角筆によって施された．角筆とは「象牙や木や竹を材質とする箸のような筆記具であり，その尖端を以って板面や和紙の面を直接に傷付け凹ませることによって訓点の符号や図譜を書いた」(小林芳規 2004)ものである．訓点は片仮名や返読点，番号やヲコト点（漢字の四隅や中心部に点を施し訓法を指定する方法）によって示され学派によって互いに相違していた．誰もが読める訓点の開発普及は江戸時代以降のことである．

これらの全てが 1970 年代中盤以前には日本で独自に開発されたものと考えられていた．

1973 年，忠清南道瑞山文殊寺の金銅仏胎内から『旧訳仁王経』が発見された．この発見により朝鮮にも日本の漢文訓読と同様の「漢文釈読」が存在した事実が明らかになった．釈読に用いられる略体口訣を「釈読口訣」と称する．より正確には「字吐釈読口訣」と呼ぶ．[4] 以下に『瑜伽師地論』から釈読口訣の例を挙げる：(南豊鉉 1999b: 73)

ラ　し　ふ　ハリ．ノ
亦爲自 心 得淸淨 故
ハ ソ ヲ ソ ア ハ ヽ

原文は縦書きであるので，漢文の上の口訣は右側に，下の口訣は左側に本来書かれている．先ず「亦」を訓読する．次の「爲」は左側に口訣があるので飛ばす．次に「自ラ」，「心 し」，「得 ふ」，「淸淨ハリ」までを順に読み下す．「淸淨ハリ」の下に「返読点」の「.」がある

[4] 字吐釈読口訣資料の一覧は伊藤英人(2008a)参照.

ため，左側に遡って「(爲)ㅅㅣㄹㅣㅇㅅㅡㅁ」を読み，最後に「故ㅇ」を読む．すると次のようになる：

亦　自ㄱ心ㄴ　得ㅎ　清淨ㅅㅣ(爲)ㅅㅣㄹㅣㅇㅅㅡㅁ故ㅇ
sto　cəii　mʌzʌmʌr　sirəkom 清淨 hʌi(爲)koa hʌciəi hʌr tʌro 故 ho
また自らの心を得て清浄たらしめんとするが故に

この二十年来，口訣研究会を中心に釈読口訣の研究は極めて盛んになってきている．釈読口訣の基本文献は南豊鉉(1999a, 1999b)である．

2000 年 7 月，韓国で角筆文献が発見された．これ以後，新たに多くの角筆文献が発見されている．中でも「角筆点吐釈読口訣」の発見の意義は大きい．「点吐釈読口訣」とは日本の「ヲコト点」に相当するもので，点やその他の符号を漢字の四隅や内部に付することよって漢文の訓読法を示したものである．[5]

2002 年には新羅時代の角筆口訣資料が発見された．小林芳規(2004)は新羅僧元暁所撰の『判比量論』(大谷大学図書館蔵，八世紀新羅写本)から角筆で記入された次のような例を見出したことを述べている．

a. 今於此中良 (第九節 26 行)
b. 不待根「ㅊㅣ」(第十節 42 行)

a の「良」は「〜に」を表す口訣であり，日本語に例えれば「送り仮名」に相当するものである．b は漢字「根」に振られた「よみ」，すなわち日本語の「振り仮名」に相当するものである．「根」の古代語の訓は pɨr であり，b は同音の訓を持つ「火 pɨr」の草書体で「根」の訓みを表記した「訓仮名」である．この八世紀新羅資料の発見は日本の片仮名の起源の問題に重大な意義を持つ．口訣は基本的には「送り仮名」に相当するが，こうした「振り仮名」の発見は口訣字が表音文字として使用されたことを物語る．後述する「ヲコト点」による訓読と併せ，日本の漢文訓読，片仮名の起源が新羅にある蓋然性が高くなった．小林芳規(2002)は奈良時代の華厳宗留学僧が新羅に留学し，それらを習い伝えた可能性を示唆している．

『判比量論』の調査は小林芳規，南豊鉉両博士によってその後進められている．南豊鉉(2012)は，2012 年 6 月時点での『判比量論』の研究状況について，現在までに 160 余字の口訣を判読したと述べている．さらに『判比量論』が日本の訓点資料の初出に半世紀先立つことから「日本の漢文訓読法が新羅の影響下で発展したことを裏付ける」ものとしている．

---

[5] 角筆釈読口訣資料の一覧は伊藤英人(2008a)参照.

一点重要なことは訓点資料の初出と漢文訓読の開始年限は一致しないということである．上述のように少なくとも七世紀の倭国には漢文訓読が存在したこと，そして同時期の新羅にもそれが行われたこと，日本の訓点の発達には新羅の影響が大きかったと判断されることは確認し得る．「片仮名＝略体口訣」の訓読への使用は新羅の影響下に日本で大きく発達を見せたと考えられる．

5.2.2. 漢文訓読の持つ意味

5.1.1.で見たように，近年の研究により，統一新羅でも奈良平安期日本でも漢文訓読が行われていたことが確認された．もちろん新羅でも日本でも中国原音による音読は維持されていた．新羅の場合，円仁の旅行記からもよく知られるように唐の国内に新羅人が集住し，漢語に通じた者が日本より遥かに多く存在したことが確認でき，また同旅行記からは唐の新羅人が法会の読経に中国音を用いていたことも知られる．

しかし，漢文訓読法の確立は，漢語を活きた言語としては知らない多くの人々，つまり新羅語や日本語のモノリンガルが漢文文献に,漢語学習を介在させずに,アクセスすることを可能にした．これは一種の対抗中国化である．

訓読によってしか漢文にアクセスできない人々は，現在の日本の漢詩漢文読者を見れば分かるように，中国語の発音を知らない．音読みする語が訓読文中に出てきてもそれは日本風に訛った漢字音つまり日本語の音韻体系内の音でしか読むことが出来ない．

一般に，言語接触が起こった場合，二言語併用が行われるが，その際，二つの言語を完全に習得していれば，コードスイッチングが行われる．現代のアメリカンスクールに通う生徒たちのように日本語と英語の二つのコードを行ったり来たりする言語使用を示す．唐の国内に住んでいた新羅人には漢語と新羅語のバイリンガル話者としてコードスイッチングを起こしていた人々がいたものと想像される．

しかし, 新羅国内, 日本国内で漢文を訓読によって学ぶ多くの学習者―留学する意思もなく，唐人と接触することもなく，ただ官吏として漢字を用いるために千字文や論語，孟子を学ぶほとんどの学習者―は，それぞれ新羅語，日本語で漢籍を読んだことになる．そこでは訓読文中の字音語はコードスイッチングではなく「借用語」として新羅語，日本語の音韻の枠内で発音される．

コードスイッチングは優勢言語への同化をもたらす．一方，いくら借用語が増えても言語の同化が起こらないのは，日本語にいくら英語借用語が増えてもそれが借用語である限り日本語話者の英語話者化は生じないことを思えば明らかである．中国語と日本語のバイリンガルが中

国語コードにスイッチすると中国語部分は「中国人の顔になって」発話するが，借用語ではそうしたことは起こらない.

漢文訓読によって新羅と日本の識字層は，一挙に全ての漢語文献に直接アクセスすることが可能になった．つまり無限の中国化を果たせる立場に立った．一方，漢語文献をいきなり新羅語や日本語で訓読している限り，読者は決して漢人にならない.

漢文訓読はいくら知的世界で中国化しても中国人にならないで済む方法であるという点で，対抗中国化の最たるものであったと看做し得るのである．そしてそれは恐らく朝鮮半島の経験をもとに日本列島にもたらされた方法であったと考えられる.

5.2.3. 対抗中国化としての漢字音の成立

上で述べたように，漢文訓読とともに新羅語風，日本語風に訛った漢字音がそれぞれ朝鮮漢字音，日本漢字音として定着したと考えられる．日本漢字音の漢音は，遣唐使廃止以後，正確な漢音による音読が立ち行かなくなる過程でこれに代わるものとして訓読が採用された時期に定着していったものと考えられている．新羅においても唐末の長安の音を全面的に受け入れて現代に繋がる朝鮮漢字音が成立したことが朝鮮漢字音の研究から知られている.

朝鮮半島ではその後高麗，朝鮮時代を通じて新羅が採用した朝鮮漢字音が伝承されて現在に至る．もちろん朝鮮漢字音の中にも字によっていくつかの時代層を示す字音が確認されるが基本的には新羅時代に成立した朝鮮漢字音を守ってきた．一方で，各時代の中国との関係から時代ごとに中国語音を示した字書，韻書も編纂された．十五世紀以降は朝鮮漢字音の標準音と各時代の中国字音は別々に査定され出版された. 後者はあくまでも外国語学習用のものであった. 漢字音自体は朝鮮漢字音を用いつつも，各漢字の本来の韻，平仄は朝鮮半島においては正確に学習された．なぜならば高麗以降，士大夫層が形成され中国同様に科挙が行われからである.

日本列島では様相を異にする．まず唐代長安音に基づく漢音のみならず，それ以前に南朝から百済経由で伝わっていた呉音も保全された．天台宗では漢音よりやや新しい時代の音を採用し，後の禅宗は唐音と呼ばれる近世漢語の音を用いた．小松英雄(1995)は日本が複数の漢字音を並存させてきた理由として仏典読誦音の整備と関係付けている．宗派の「アイデンティティーの確認」と「異国的であるほど法会の参会者に神秘性を強く印象づけ」ること，「その宗派が最新の中国仏教に直結していることを印象づける効果」を狙って抑揚を含めた読誦音が伝承されてきたとされている.

一方，士大夫層が形成されなかった日本では，儒学は「博士家の家学」とされ，科挙も行われず，中世以降の武家政権下では「倭化漢文」に基づく漢字による日本語文が行政に用いられたため，公家や仏僧以外は漢文そのものから遠のいてしまった．禅宗の唐音も *chinoiserie* とし

ての「見せびらかし」的要素が強く，中国語学習は江戸時代の唐話ブームまでまともになされなかった.

以上で古代における朝鮮半島と日本列島における中国化と対抗中国化の様相を見てきた．新羅が先行する形で平安中期までは両者は似た中国化と対抗中国化の様相を示していた．以下では中世以降朝鮮時代後期に至る時期の朝鮮の中国化と対抗中国化の諸相を「点描」的に見ていくことにする.

6. 点描

6.1. 点描その１「訓民正音」

今まで述べてきたように新羅と律令国家日本は，①仏教を重んじ，②漢文を訓読し，③片仮名(略体口訣)を含む訓点システムを用い，④漢文の他に自国語表記のための漢字文(吏読文)を併用する，など類似した書記文化を持っていた.

918 年に建国し，936 年には朝鮮半島での覇権を確立した高麗でもその後十三世紀前半まで，自国を「華」とする高麗版中華意識に基づく八関会を催し，首都を「帝都」とするなど，平安後期の律令政権と並行した国家運営を行ってきた．鎮護国家仏教を奉ずる点も同様である．十二世紀に，日本では武家政権，高麗では武臣政権が確立するところまで両国は似た歩みを見せる．高麗でも漢文訓読，吏読文は盛んに行われていた．なお高麗の北に位置し，高麗の朝貢を受けていたキタイ帝国(遼)でも漢文訓読が行われたのみならず, ハングルに先立つこと 500 年の 920 年代には独自の文字である契丹文字を創製し使用していた．したがって十世紀には，北からキタイ, 高麗, 日本の順に漢文をアルタイ型の語順に訓読する地域が並んでいたことになる.

もちろん高麗は宋, キタイ(遼), ジュシェン(金)に朝貢し, より中央集権的な国家運営を行い, 何よりも十世紀中盤に本格的な科挙を導入するなどの点で平安期日本とは異なる．科挙の実施には地方の地域社会における受験参考書の普及などのインフラ整備が不可欠であるが，平安期の日本はその条件を満たせなかった.

十二世紀以降，モンゴルの世界化が始まってから両国は全く異なった方向へ進みだす．上述のようにモンゴルによるグローバライゼーション(まだ，地「球」化ではないが)に完全に巻き込まれた高麗とは異なり，「颶風」による国難回避により『八幡愚童訓』などの普及を通して「神国」意識を増大させていった日本では「三韓」は征伐される対象に過ぎず，「天竺・震丹・本朝」の三国からなる世界観の中に朝鮮半島は位置づけられなくなっていく.

モンゴル，ジュシェン色の濃厚な元の直轄地出身の李成桂によって十四世紀末に建国された朝鮮王朝は四代の世宗に至って中華の聖君を目指すが如き統治を行う．その治世下の最大の達成が「訓民正音」すなわちハングルの創製である．以下，伊藤英人(2010)からの引用である.

1446 年に「訓民正音」が公布されたことはよく知られている．世宗による『訓民正音』御製序を見てみよう．国之語音異乎中国　与文字不相流通　故愚民有所欲言 而不得伸其情者多矣　予為此憤愍然 新制二十八字　欲使人人易習　便於日用耳

ここで説かれていることを，字句を補って解釈すれば以下の如くである．

「国」の言語の語形(音形)は中国と異なっているため「漢字」と対応していない．このため，漢字をしらない民は何か申し述べたいことがあっても，（朝鮮は文書主義を採っており漢文の文書を出さねば何も主張できないので）その旨を開陳することが出来ずにいる．私はこのことをかわいそうに思って，新しく二十八字母からなるアルファベットを作った．人々に簡単に学んでもらって日用に便利に使ってもらいたい．

世宗の考えを要約すると，①まず，王室とその領域に住む人々が言語的に等質であり，それが「国」と観念された，②その言語は中国と異なっている，③漢文によらずアルファベットによって話し言葉を文字化し，尚書院・行政言語にヴァナキュラー（俗語）を用いようとした，ということになる．さらに翌年の 1447 年には金属活字によって仏典の翻訳が刊行されている．

ベネディクト・アンダーソンの読者であれば，十五世紀朝鮮の早熟性に瞠目するはずである．言語的同質性によって想像された「国」という共同体の民衆のためのヴァナキュラーの文字化，正書法の確定，標準文語の確立が，訓民正音公布後の約十年で成し遂げられた事実のもつ世界史的早熟性は強調されてよい．

しかしながら，世宗のこの壮途はその多くが実現されずに終わった．訓民正音公布後，政府レベルでの正書法の改正は 1465 年をもって終わりを告げ，あとはいわば野放しにされた．本来であれば十五世紀に確立した標準朝鮮語文章語が後の規範言語として古典語化されるはずであったが，そうしたことは起こらなかった．行政文書はその後も漢文吏読中心に行われた．

上記の如く，「訓民正音」公布の先駆性は世宗の宣言にあるヴァナキュラーの文字化と行政文書の俗語化の意図にあった．ハングルの制字原理が優れていたことを認めるのに吝かではないが，この文字は契丹文字，女真文字，西夏文字，パスパ文字という先行文字の最終走者として，特にパスパ文字の多大な影響下に創出されたこともまた事実である．朝鮮初期という，パックス・モンゴリカの記憶も生々しい時期にこの文字が作られたことも傍証となる．

「訓民正音」は「諺文 おんもん」と呼ばれた．「諺」は「文」に対する「地方語・俗語」の意味である．伊藤英人(2010)で述べたように 1460 年代を中心に朝鮮時代の王のうち最も崇仏心の篤い王であった世祖によって設置された刊経都監によって多くの仏典が朝鮮語に翻訳された．これらは「諺解」と呼ばれ漢文テキストの朝鮮語訳のスタイルとして確立された．十六世紀以

降の儒臣層の勢力拡大に伴い，仏典の翻訳刊行は寺刹へと移るが，巻末に翻訳開板の功徳を求めた善男善女，とくに多くの女性の名が施主名として刻まれている．諺文はこのように「王室―仏教―女性」と強い親和性をもつ朝鮮語表記文字として定着していった．

伊藤英人(2010)でも述べたように諺文使用のこの流れは十九世紀には新旧キリスト教布教と結びつき近代以降ハングル文字ナショナリズムと結びついて今日のハングル専用に結実する．

一方，男性士大夫層は諺文を女性への手紙，朝鮮の短詩である時調以外には用いることもなく，漢文習得以降は書記活動を漢文に一本化していった．日本のように定家以来整備されていった自言語古典の参照枠が存在せず，仮名遣いに相当する綴字法も検討されることはなかった．時調等に見られる抽象的語彙は漢語であり，これらがを朝鮮語で表されることもなかった．諺文の辿った歴史は，決して一部の論者のいう「知の革命」といえるようなものではなかったことは銘記しておきたい．

以下では仏教界における諺文(朝鮮語・ヴァナキュラー)使用の一面を禅仏教における日韓の差という観点から考察し，続いて士大夫層の漢文漢語使用の様相を点描することにする．

6.2. 点描その２「禅寺の風景」

十五世紀中盤以降，朝鮮では廃仏政策が採られた．士大夫のように北京に行くことも叶わず，僧侶は国内山中の寺刹で弁道工夫に励むことになった．高麗時代には盛んな国際交流が行われた朝鮮の仏教界も朝鮮語のモノリンガル世界になっていく．この点で室町期に盛んに明と往来した日本の禅宗とは様相を異にしていく．明末清初にも多数の亡命僧を受け入れ，唐音で読まれる大量の禅語を生み出した日本の禅刹とは違う道を歩んだ．村井章介(1995)は鎌倉五山を始めとする日本の禅刹がバイリンガル空間であったことに言及している．宇治の黄檗宗万福寺で江戸期にも近世中国語が行われたことは「山門を出れば日本ぞ茶摘歌」の一首からも知られるとおりである．しかし築島裕(1995)の述べるように唐音の読経には声調が伴わっておらず，実質的なコミュニケーションのためではなく，禅寺での近世中国語使用は，多分に *chinoiserie* 的な要素を含む中国語使用であったと考えられる．

日本の禅宗では今日に至るまで多くの禅ジャーゴンが使用され続けている．以下は全て『無門関』からの例である．

正恁麽時作麽生対 ショウインモのときソモサンかこたえん
惣用不著 ソウにユウフジャク
若向者裏対得著 もしシャリにむかってタイトクジャクせば
者些尾巴子 シャシャのビハス

十五世紀に教宗と禅宗に二分された朝鮮の仏教は日本的な分類からは基本的に全て禅宗であると言ってよい. 禅宗である以上, 祖師の語録を学び参禅することは日本の禅宗と同じである. しかしながら朝鮮禅においては日本の禅宗のような過度の近世漢語の使用はない. 刊経都監から翻訳刊行された禅語録の一つ,『蒙山和尚法語略録諺解』の例を見てみよう.

作麽生 əste hʌnio　どうなのだい？
曾切著者箇無字否 arai 無?字 to sakitosonia　まえにこの無の字もといてみたかな？

日本の禅家ならば, それぞれ「ソモサン」,「曾てシャコの無字をセツジャクせるやいなや」と読むところを「どうなのだい？」,「まえにこの無の字もといてみたかな？」という極めて平明な口語朝鮮語に諺解している.

禅の修業, 祖師の語録の理解という点からは, 朝鮮の禅寺における翻訳（諺解）の方が本来の宗教的目的に叶っている. 日本の禅ジャーゴンは宗教的には無意味な *chinoiserie* ないしは pedantry である. 雰囲気だけは外国的なものを好むという異文化志向性は日本においてはるかに濃厚であったし, 今もそうであると言えるかも知れない.

6.3. 点描その３「正音への志向」

伊藤英人(199b5,2002, 2004b,2005, 2011, 2012)で述べたように,朝鮮王朝時代には「正しい漢字音」が一貫して志向された.「訓民正音」自体がその現れであって,翌年には東国正韻式に落ち着くものの,1446 年時点では世宗は「一〜十」を'*ʔit, *zi, *sam, *sʌ, *ŋo, *riuk, *c^{h}it, *pat, *ku(w), *ssip'と表記発音させるような字音体系を構想していた.『東国正韻』序にいう「七音之変」,「清濁之変」,「四声之変」も中国の標準からずれていることへの慙愧の表現である.

伊藤英人(2004b,2005)で述べたように,1447 年及び 1459 年に陀羅尼に付された字音は『洪武正韻訳訓』式の中国字音であった.「正しく読誦」される必要のあった陀羅尼には東国正韻式の「郷音」ではなく,「正しい」中国字音が必要であると観念されたためであると考えられる.

ベトナム,日本,琉球,朝鮮のうち,官撰韻書が編纂されたのは朝鮮のみであった.『奎章全韻』が中国字音への配慮から知組字を章組字に併せて歯音系の字母を用いたことは広く知られている.

1750 年成書の申景濬 『韻解訓民正音』は,理想的な字音を提示したものだが,伊藤英人(1995b,2011,2012)で指摘したように,「朝鮮の方が中国より字音が正しい場合もある」という言及を行っている.

且今雖不明古有存者　中土雖不行而他国有用処　至於知徹澄孃　我国西北人用之
在京泮村人亦用之　故今依旧法備三十六母焉（『韻解訓民正音』）

いわゆる舌上音を含む三十六字母に復する理由として「我国」の平安道,ソウル成均館一帯の人々がこれを用いることを挙げている．これは後述する,明清交替後の「自国字音」への正当性の自覚の現われと見るべきであろう．

6.4. 点描その４「中国化の極限へ―朝鮮時代後期」

上に述べたように朝鮮時代の士大夫の書記活動は漢文一辺倒になった．漢文訓読法も滅びその存在すら忘却された．漢文は朝鮮漢字音で直読され，間に朝鮮語のテニヲハを挿むという漢文直読法に一本化された.

十六世紀以降，仏典のみならず，基礎的な経書も諺解された．以下の如くである.

直読文　子 cʌ 曰 oar 学 hʌk 而 i 時 si 習 sɨp 之 ci miən
　　不 pɨr 亦 iək 説 iər 乎 ho a
諺解文　子 cʌ i kʌrʌsiatʌi 学 hʌk hʌia 時 ro 習 hʌmiən sto 説 hoti aniria　論語栗谷諺解
　　子が言われるには学して時に習すればまた説ではなかろうか

直読文に下線を施した部分が間に挿入するテニヲハ(吐)である. 重要なことは朝鮮の童蒙が暗記すべきテキストは直読文の方であって諺解文ではないという点である.「訓読の声」は朝鮮には存在しなかったと見ることが出来る.

江戸期の日本人学者で釜山にも滞在し日本における朝鮮語教育の鼻祖になった雨森芳洲(1666-1755)は外国人としてこうした朝鮮の漢文読法を高く評価している.

> 書莫善於直読　否則字義之精粗　詞路之逆順　何由乎得知　譬如一箇助字　我国人則目記耳　韓人則兼以口誦　直読故也　較之我国人差矣　(雨森芳洲 『橘牕茶話』)
> 書は直読するに限る．でなければ字義の精粗や詞路の逆順をどうして知り得ようか．例えば一つの助字を日本人は目で記憶するだけである．韓人はその上に口で唱える．直読のおかげである．これに較べれば日本人のは劣っている.

> 韓人直以国音　我国人国音不可直読　故仮音於唐雑記熟　比之韓 其為雑也甚矣
> (雨森芳洲 『橘牕茶話』)
> 韓人は朝鮮漢字音で直読するが日本人は日本漢字音で直読出来ない．それで唐代の音を借りてごたまぜにして覚える．朝鮮の方法に較べて雑なること甚だしい.

漢文直読は数多くの固有の朝鮮語の単語を滅ぼした．十五世紀にはそれぞれ moih,　kʌrʌm, pʌrʌm と固有朝鮮語で呼ばれていた「山」,「川」,「壁」といった語も「山 san」,「江 kaŋ」,「壁

piək」という漢語に置き換わってしまった.

雨森芳洲はまた朝鮮における漢語志向現象について次のように証言している.

> 朝鮮人言語 本於文字者爲好 其他俗下所用 不據文字者斥之 爲常言[常言者俚言也] 在官者不敢出口 (雨森芳洲 『橘牕茶話』)
> 朝鮮人の言語で漢字に基くことばはよいものとされ，その他の下々の用いる漢字に基かないことばは斥けられ，「常言」と言われる[常言とは俚言のことである]．官途にある者は敢えて口にしない.

こうした華言への憧憬はもちろん朝鮮知識人がより強く志向し，かつ実践していた.

『熱河日記』という中国旅行記で知られる朴趾源(1737-1805)は次のように述べている.

> 我人初見中国孺子隔溪呼母「水深渡不得」大驚以為中国五歳児開口能詩　此殊不然是乃語也　(簡略)　有村媼売酒　問「路僻人稀　有誰沽飲」対曰「花香蝶自来」(簡略)自成韻語 (朱瑞平校点 1997: 277)
> 中国で幼い子供が川を隔てて母に向かって「水深渡不得！」と叫ぶのを始めて聞いたとき，「中国では数え年五歳の子供も詩を作るのか」とびっくりした．が，よく考えてみたらこれは(中国の)「言葉」なのだった．(中略)村の酒売りの媼に，こんな人里はなれたところで誰が酒を買って飲むのかと尋ねたら「花香蝶自来」と答えた．(中略) 立派な詩だ.

朴斉家(1750～？)に至ってはさらに過激に，朝鮮語を廃すべきことを主張する.

> 漢語文字大本　(簡略)　蓋中国因話生字　不求字而釈話也　故外国雖崇文学喜読書幾於中国　而終不能無間然　以言語一大膜子　莫得而脱他　我国地近中華　音声略同　挙国人尽棄本話　無不可之理　夫然後　夷之一字可免(李翼成訳注 1971:343)
> 漢語は文字の根本である．(中略) けだし中国ではことばが先にあって字が出来たので字を知らなくても意味が分かる．外国人が文字(漢字)を崇めて中国の本ばかりを喜んで読んでいてもどうしても隙間が生じてしまう．言語が膜のようになって逃れられないのだ．わが国は中華に近いのだし，音声もほぼ同じなのだから(伊藤注 : 漢字音が近似しているのだから)，国中の人がこぞって本来のことばを捨ててしまうことだって決して無理な相談ではないはずだ．そうなって始めて野蛮人と言われなくなるだろう，

注意すべきは，朴斉家は固有の朝鮮語を止めて漢語を用いるべきだとしているのであって，中国語音を採用しようと言っているのではない点である．「朝鮮と中国の漢字音は近い(音声略

同)」のだから例えば「花」を kos と呼ばず朝鮮漢字音で hoa と唱えるべきであるとの主張であると解される.

伊藤英人(2011)で述べたように，明清交替により満州人が中華の主人となった後，十八世紀に入ると「中国(清)よりも中華な朝鮮」という自覚は，朝鮮漢字音の方が今の中国字音よりも「正しい」という認識を産出した．上述のように申景濬が 1750 年に著した『韻解訓民正音』では中国語音語よりも正しい朝鮮漢字音を創出している.

公平を期すために捕捉すれば明清交替後，明の復活が叶わないと思われた時点で，中国よりも中華な自国という認識は江戸期日本でも胚胎されている．しかし現実の中国化，中華志向性の度合いは日本に比べるべくもなく朝鮮において熾烈であった.

言語接触の観点から重要なことは朝鮮にも「転文」が存在したかという点である．転文とは太田辰夫(1954/1988:261)で再導入された概念であり, 中国語における口語から文言へのコードスイッチングを意味する. 現代朝鮮語における文言由来の故事成句の多く直読で残っていること，科挙のためだけの暗記を経験してきたものがコーパスを共有していたこと，暗記すべきテキストが直読漢文であったことを勘案すれば朝鮮においても朝鮮語と朝鮮漢字音による直読漢文間の口頭におけるスイッチは，限定的であれ存在し得たと考える．[6]

6.5. 点描その５「近代を迎えて」[7]

上述のように諺文は，漢文一辺倒の男性社会ではなく，主に女性の世界で守られてきたが，十九世紀に入り，その位相を変えてゆく.

最初の波はキリスト教の普及である．多くの殉教者を出しながら主にフランス人宣教師らによってキリスト教布教材が純諺文で出され，広まっていった．こうしたキリスト教と諺文の親和性は初の朝鮮人神父金大建による「教友たちよ，見よ」(1845 年)，等を経て，新旧教の差はありつつも 1896 年の徐載弼による純諺文紙「独立新聞」の刊行へと結実する．今日の朝鮮語表記法，標準語制定，辞典編纂に携った朝鮮語学会(今日のハングル学会)も多くのキリスト教徒によって構成され，ハングル普及とキリスト教は二十世紀以降も不可分の関係にあった.

1894 年，諺文は初めて「国文」として政府の公用文字として認定されるが，これと前後してさまざまな朝鮮語文の変種が登場する．日本の明治期の文章，表記法の影響を受けたと見られる「国漢文」による著作の代表例としては兪吉濬の『西遊見聞』が挙げられよう．また，1907 年「万歳報」に載せられた李人稙の小説『血の涙』や翌年の兪吉濬による『労動夜学読本』には，日本語と同様の「訓読みの振り仮名」や「送り仮名」がハングルで振られた試みも登場し

[6] 転文については伊藤英人(2004c)で論じた.
[7] 以下 6.4.は伊藤英人(2010)の一部を加筆修正したものある.

た.

しかし，開化期初頭の知識人の大半は，兪吉濬のようには達意の朝鮮語文を書くことが出来なかった．なぜなら，彼らが訓練を受けてきたのは科挙受験用の漢文(文言)のみであったからである．「国漢文」とは文字通り，漢字・国文(諺文・ハングル)混じり文であるが，明治期の普通文に似たものから漢文懸吐そのままのものまでさまざまな変種が混在する．1905 年，皇城新聞社説として掲載された張志淵による「是日也放声大哭」の冒頭と末尾を比べてみよう．

a) 曩日　伊藤侯 ka 韓国 əi　来 hʌmʌi…

b) …嗚呼 ra 痛矣 ra　我二千万為人奴隷之同胞 iə　生乎 a?　死乎 a?　四千年国民精神 i 一夜之間 əy 猝然 滅亡而止乎 a?　痛哉 ra 痛哉 ra　同胞 a 同胞 a

冒頭部分 a)は「さきに伊藤侯が韓国に来るに」という朝鮮語の語順であるが，b)末尾は「吐」を取ればほぼそのまま漢文である．斉藤希史(2007)の言う，身体に染み付いたリズム（訓読の声）は，朝鮮の場合，諺解体ではなく，順読懸吐体，すなわち漢字音による直読文であったからである．

開化期から 1910 年の植民地化に至る時期はさまざまな文体の試みの時期であった．明治期の日本と異なるのは，ハングルのみの新聞，小説，医学や世界史の教科書等々が数多く出されている点である．科挙の廃止と漢文のみを書き言葉としてきた世代の衰退消滅のうちに朝鮮は植民地期そして解放を迎える．

7. 結語

朝鮮半島に漢人が漢語，漢字を齎してから数世紀を経て，高句麗で漢字の変則的使用が始まった．それは新羅と倭に伝えられ漢字を自言語表記に用いる方法(借字表記法)として八世紀には完成の域に達した．統一新羅も日本も借字表記法を用いて自国語の詩歌集を編纂し，「中国とは違う」国家空間を表象した．新羅の影響下に漢文訓読法，訓点，片仮名(略体ロ訣)が発展し平安後期日本，高麗では漢文訓読が盛行された．また自言語の音韻体系に併せて朝鮮漢字音，日本漢字音が成立し，これにより，朝鮮半島と日本列島の人々は「中国人になることなしに」無限に中国文明にアクセスする方途を所有するに至った．

モンゴルによる世界化に巻き込まれた朝鮮では，その中で接した数々のアルファベットを参照し，1446 年には訓民正音を公布する．創製者の世宗の意図は「国」のヴァナキュラーの文字化，国語の確立，ヴァナキュラーの司法，行政への使用にあり，そのことの先駆性には驚くべきものがある．しかし，その後の儒臣の中国化，漢文訓読法の放棄，ことに明清交替以降の小中華意識の増大の中で諺文は顧みられなくなり，諺文は「女性」，「仏教」の世界で主に用いら

れることとなった．十八世紀には朝鮮知識人の中国化は極限に達し，朝鮮語を捨て去ろうという主張さえもが現れる．

十九世紀には諺文はキリスト教との深い関係を持ち，近代以降のハングル普及に多大な役割を果たす．二十世紀初頭に大韓帝国学部は国文研究所を設置し，国語確定の作業に入った．また小説その他の文学，教科書，新聞などが純ハングル文で書かれ始めた．

1910 年の日韓併合により，朝鮮語は「国語」の地位を失うが，朝鮮語研究会(のちのハングル学会)により，正書法，標準語が定められ，辞書編纂も行われた．日本の植民地当局の弾圧により辞書編纂は獄死者を出すに至り，1943 年には朝鮮語は完全に禁止された言語となった．

1945 年の解放以来，北朝鮮ではハングル専用を実施したが，韓国では日本植民地期以来の漢字ハングル混じり文が長く使用された．インターネットの普及後，特に 2000 年代以降，韓国では漢字ハングル混じり文はほぼ完全に使われなくなり，ハングル専用時代を迎えた．世宗が意図したヴァナキュラーの全面アルファベット化が実現したわけである．

日本では，借字表記法が洗練され，全面的に用いられることになった．「漢字と漢字に由来する音節文字を混用する」借字表記法は，その淵源を新羅に持つと考えられるが，むしろ日本で開花し，今日に至る．朝鮮では漢字音は基本的に一定しており，そのことがハングルだけの表記を可能にする素地となったが(ハングル表記による形態素の同定が可能であるため．北朝鮮では韓国より徹底して一字一音になるように字音を整理した)，日本では常に複数の字音が行われてきた．それはしかしコミュニケーションのためではなく，宗派的アイデンティティーを示すための「飾り」の要素を多大に含んでいる(明治期のキリスト教の「呉音嫌い」も宗派的である点は同様である：例　礼拝らいはい→れいはい)．

八世紀の対抗中国化に端を発した日韓両語の書記史が結果的に「借字表記法の維持発展：話し言葉のアルファベット化」という全く異なった帰結を迎えるに至った最大の要因は，モンゴルによる世界化経験の有無にあるのではないかと思われる．

8. 今後の課題

朝鮮半島の諸言語と漢語の言語接触の問題は,「漢文」がその後の朝鮮半島の正式の書記言語になった経緯を勘案すると,単なる言語接触の問題でなく，cosmopolitan language と vernacular, vernacularisation の問題群として捉える必要があると考える．

アンダーソンの出版資本主義公理に対する違和を，朝鮮を例に挙げて論じたのは Walraven(2004)であり，vernacularisation の一般化に対して，南アジアの例を挙げて反論したのが Pollock(2006)である．

Pollock(2006)において提起された vernacularisation の問題を最初に朝鮮半島のそれと対照させ

て考察を加えたのは King(2006)である．それを引き継いでさらにこの問題を論じたのが Whitman(2010)であり，「諺解」とは何かをこの文脈で考えた論考が Park(2013)である．

時間的に再考してみよう．李成市(2013)は，平壌貞柏洞 364 号墳から初元四(BC45)年楽浪郡県別戸口簿と『論語』竹簡が出土したことに触れ，板槨墓という墓制の特徴から衛満朝鮮以来の現地出身の楽浪郡府属吏を墓主と推定するのが妥当であるとしている．本稿で見た揚雄の紀元前後の同時代記述から，当時の朝鮮には北燕朝鮮方言区という大方言区の下位方言区としての「朝鮮方言」が分化成立するほどに，漢人の層の厚みと歴史がすでに存在したと考えられることから『論語』竹簡の持主も漢語朝鮮方言話者としての在地漢人と考えるのが妥当であろう．この時期にはまだ現地語と漢語は二重言語使用，コードスイッチングなどが見られた段階であったと考えられ，現地語話者が漢語書記を現地語化してアクセスしたと考える何らの積極的根拠も存在しない．

楽浪・帯方郡消滅後,高句麗の文字資料が出現するまでの空白時期にどのような変化・継承があったのかを考える必要がある．「中原高句麗碑」は明らかに確信犯的な漢字列の自家使用であり，しかもそれを「石に刻む」という点でさらに確信的漢語侵犯である．もしこうした現象が，高句麗に始まるのであれば，「対抗中国化による非漢人化」のための装置の発明は高句麗に帰することになる．高句麗語同様にアルタイ型の語順を持っていたであろう「五胡」に先例がないかどうか慎重に調べる必要がある．

借字表記法とハングルの創製は朝鮮半島に veranacularisation を齎したろうか．「諺解」は極一部の漢文文献に施されたのみであり，朝鮮時代の士大夫の暗記の対象は懸吐順読漢文であって諺解文ではなかった．科試と無縁な禅刹で口語に近いことばでマニュアルが訳されたのと対照的である．この意味で，借字表記法と諺解は「部分的俗語化」であったに過ぎず，「全面的俗語化」ではなかった．例えば，チベットではサンスクリットからの全面的俗語化以後，重要な宗教的,哲学的著作がチベット語によって著述された．朝鮮において重要な学問的著述が朝鮮語でなされることは決してなかった．この意味でハングルの発明は何らの「知の革命」を齎していない．朝鮮半島の俗語化を通文明的視野から再考する必要がある．

字音と語音の関係もさらに深めて考察する必要がある．漢字音は「字音」であり，語音ではない．中国においても有力諸方言には「全ての漢字をその音系で読める」複数の漢字音が存在する．閩語廈門方言で「ヒト」を lang という．しかし『千字文』の「人」は lin と読まれる．廈門人にとって lang は「国之語音」である．しかしながら日本，朝鮮，ベトナムのように「字音と字訓」がセットになって漢字が教育されることはなかった．漢字の存在するところに「宛字」のないところはなく，中でも閩語では盛んに行われる．台湾語で「人」を dang,「肉」を baʔと読むのは「宛字」の読みであり，故王育徳氏はこれを「訓読」と称した．しかし中国では

これを「文白異読」という．あくまでも「字」が先にあるのである．

「音借字」,「訓借字」も漢語方言にその例がある．ラマール(2005)は客家語漢字表記基督教文献において，それぞれ「我々」,「あなたらの」を現す客家語 nga^{1} teu^{1} に nya ^{1}teu^{1}が，1883 年には「[口雅] 兜」,「[口惹] 兜」と宛てられ，1931 年には「我等」,「尓」が宛てられている事実を指摘している．前者は「音借字」，後者は「訓借字」である．

客家人や台湾人には「国之語音」を表音文字で表記する恩恵が与えられなかったのだろうか．事実はそうでなく C・ラマール(2005)が述べるように，また台湾における「教会ローマ字」の普及を見ても知り得る通り，宣教師によるローマ字表記が存在した．にもかかわらずこれらの漢語諸方言は今日再び漢語の方言としてあり，「国之語音」をもとに言語的独立を果たすことはなかった．漢語諸方言のうち，唯一表音文字化して漢語から独立した言語は，東干語のみである．客家語や台湾語のローマ字は基督教文献へのアクセスは可能にしたが，sinographic cosmopolis における普遍的(儒教)コードへのアクセスは漢字によるしかなかった．一方，東干人は全員がムスリムとしてアクセスすべきコーランのアラビア語を cosmopolitan code として持ち，小児錦＞ローマ字＞キリル文字という表音文字の伝統を有していた．

朝鮮におけるハングル化，ベトナムにおけるローマ字化は所属普遍世界の変更を含意するとすれば，上述の cosmopolitan code と書記体系の係りも視野に入れた考察を朝鮮半島の書記史に持ち込む必要があると考えられる．

最後にラムゼイ(1990)の次の言及を引用しよう．

> アジアでかつて使われたすべての書記体系の中で，漢字の体系は最初からそれを使うことを想定していた言語以外のどんな言語を表記するに際しても，確かに最も不適当な代物の一つである．それを用いるためには，どうしてもまず中国語を勉強して，それからその文字を書かねばならなかった．漢字をアルタイ語のような多音節で語形変化のある言語に適用するのに伴う巨大な困難は，日本人を除くすべての北方民族の限界を越えたものであったと思われる．(下線部筆者)

二十一世紀の今日，確かに「漢字を日常的に使用しつつ，非中国し続けている」地域は日本語圏のみである．しかしこれは「漢字を用いる，まさにそのことによって非中国化する」方法を，現在知り得る限り，五世紀初頭には開発していた高句麗の人々の試みをその濫觴とする，と見るべきである．この奇抜な，ある意味で革命的な試みが，さらに遡り得るのか，またその後の様相が中国内外の類似した現象と如何に異なるか等について，巨細な研究が要請される．

参考文献

アルファベット順．日本語はヘボン式，朝鮮語は Yale system，中国語は拼音による．

青山学院大学文学部日本文学科編・発行(2005)『文字と言葉—古代東アジアの文化交流—』

鮎貝房之進(1934)『雑攷』第六輯上編，京城

Beckwith, C. (2007) *Koguryo: The Language of Japan's Continental Relatives*, Brill, Leiden

福井玲(2009)「韓国・朝鮮の漢字」大西克也・宮本徹(2009)所収

谷風主編(1993)《辭書集成》一，團結出版社

弘文閣影印(1984)『論語栗谷諺解』弘文閣

侯玲文(2009)《上古漢語朝鮮語對應詞研究》民族出版社

石井正敏(2003)『東アジア世界と古代の日本』山川出版社

李翼成訳注(1971)『朴斉家　北学議』乙酉文化社

市大樹(2012)『飛鳥の木簡』，中央公論社

伊藤英人(1995a)「関於中世韓語漢語借詞声調幾箇問題的探討論」『韓国学研究』4，北京大学韓国学研究中心

伊藤英人(1995b)「申景濬 uy 『韻解訓民正音』ey tayhaye」『国語学』25，韓国国語学会

伊藤英人(1997a)「中期朝鮮語正音表記漢字語及び漢語借用語について」『日本語と朝鮮語』下，国立国語研究所

伊藤英人(1997b)「漢文明の受容」『もっと知りたい韓国』1，弘文堂

伊藤英人(2001)「関於中世漢語時態与体的範疇」杭州大学韓国学研究所『韓国学研究叢書』

伊藤英人(2002)「高宗代漢学書字音改正について—『華語類抄』の字音を通して—」朝鮮語研究会『朝鮮語研究』1

伊藤英人(2004a)「講経と読経—正音と読誦をめぐって」朝鮮語研究会『朝鮮語研究』2

伊藤英人(2004b)「刊経都監訳経僧の白話解釈と翻訳をめぐって—『蒙山法語』諺解の分析—」『朝鮮学報』193

伊藤英人(2004c)「刊経都監訳経僧の白話解釈と翻訳をめぐって—『蒙山法語』諺解を中心に—」第八回東アジア諸言語研究会発表稿：2004 年 6 月 6 日，於青山学院大学

伊藤英人(2005)「関於十五世紀朝鮮対正音的認識」遠藤光曉他編『韓国的中国語言学資料研究』学古房

ITO, Hideto(2005) Grammatical Markers of Early Baihua and Late Mediaeval Korean, *Corpus-Based Approaches to Sentence Structures*, John Benjamins

伊藤英人(2007a)「『翻訳老乞大』の「了」の朝鮮語訳をめぐって」東京外国語大学語学研究所『語学研究所論集』12

伊藤英人(2007b)「漢字音教育法」『韓国語教育論講座』1，くろしお出版

伊藤英人(2008a)「文献解題：歴史言語学　古代語および前期中世語」『韓国語教育論講座』4，くろしお出版

伊藤英人(2008b)「浅談有関借字表記法研究的幾箇問題」遠藤光曉他編『韓漢語言研究』学古房
伊藤英人(2009)「類型論 mich 言語接触 uy 観点 eyse pon 韓国語 wa 日本語」伊藤智ゆき編『朝鮮語史研究』アジア・アフリカ言語文化研究所
伊藤英人(2010)「朝鮮半島の書記史―不可避の自己としての漢語」中村春作他(2010) 所収
伊藤英人(2011)「朝鮮時代の近世中国語の「翻訳」について」『東京外国語大学論集』83
石見清裕(2009)『唐代の国際関係』山川出版社
金完鎮(1980)『鄕歌解読法研究』Seoul, 大学校出版部
金文京(2010)『漢文と東アジア』岩波書店
King, Ross(2006) Korean kugyol writing and the problem of vernacularisation in the Sinitic sphere. Paper presented at the Association for Asian Studies, Boston
小林芳規(2002)「韓国における角筆文献の発見とその意義―日本古訓点との関係―」朝鮮学会『朝鮮学報』182
小林芳規(2004)『角筆文献研究導論』上巻 東アジア編, 汲古書院
小林芳規(2005)『文字の交流―片仮名の起源―』青山学院大学文学部日本文学科編・発行(2005) 所収
小松英雄(1995)『日本漢字音の諸体系』築島裕(1995) 所収
河野六郎(1957/1980)「古事記における漢字使用」『古事記大成―言語文字編』平凡社 (河野六郎 1980 所収)
河野六郎(1980)『河野六郎著作集』3, 平凡社
河野六郎(1987)「百済語の二重言語性」『中吉先生喜寿記念・朝鮮の古文化論叢』国書刊行会
河野六郎(1993)『三国志に記された東アジアの言語および民族に関する基礎的研究』平成２・３・４年度科学研究費補助金 一般研究（B）研究成果報告書, 東洋文庫
国立歴史民俗博物館(2002)『文字のある風景』
小谷博泰(2006)『木簡・金石文と記紀の研究』和泉書院
草川昇(2001)『五本対照類聚名義抄和訓集成』汲古書院
ラマール・C (2005)「地域語で書くこと―客家語のケース(1860‐1910)―」村田雄二郎・C・ラマール編『漢字圏の近代』所収
Li, Canghuy (2001)『新羅時代 uy 漢字音 声母体系 uy 通時的研究』慶北大学校博士学位論文
李基文(1998)『新訂版国語史概説』太学社
李丙燾校訳(1977) 『三国史記』乙酉文化社
劉君惠(1992)《揚雄方言研究》巴蜀出版社
デイヴィッド・ルーリー(2013)「世界の文字史と『万葉集』」笠間書院
松本克己(2005)「新説・日本語系統論」『月刊言語』34-8, 大修館書店
松本克己(2010)『世界言語の人称代名詞とその系譜』三省堂
Mazur, Ju. N., Koncevič, L. P. (2001) Koreiskij jazyk, *Jazuki rossijskoj federacij i sosednix gosdarstv, Nauka*, Moscow
森博通(2003)「稲荷山鉄剣銘とアクセント」小川良祐他(2003)所収
森博通(2011)『日本書紀成立の真実―書き換えの主導者は誰か』中央公論社

森平雅彦(2011)『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島』山川出版社
村井章介(1995)『東アジア往還』朝日新聞社
中村春作・市来津由彦・田尻祐一郎・前田勉編 (2011)『続「訓読」論』勉誠出版
南豊鉉(1999a)『國語史 lul wihan 口訣研究』太学社, Seoul
南豊鉉(1999b)『『瑜伽師地論』釈読口訣 uy 研究』太学社, Seoul
南豊鉉(2000)『吏読研究』太学社, Seoul
南豊鉉(2005)「韓国の古代吏読文の「之」について」青山学院大学文学部日本文学科編・発行(2005) 所収
南豊鉉(2009)『古代韓国語研究』Sikanuy mullay
南豊鉉(2007)「韓国 uy 口訣 kwa ku 讀法」2007 年 3 月 23 日, AAS 発表資料
南豊鉉(2012)「新羅時代 uy 写経 kwa wuliuy 文化」『語文研究』175, 韓国語文会
南豊鉉(2013)「古代韓国の漢文釈読法と訓借について」Accessing the Cosmopolitan Code in the Sinographic Cosmopolis, 2013 年 6 月 17 日, 早稲田大学発表資料
日本随筆大成編集部(1994)『日本随筆大成』新装版　第二期　7, 吉川弘文館
小川良祐・狩野久・吉村武彦編(2003)『ワカタケル大王とその時代』山川出版社
沖森卓也(2003)『日本語の誕生　古代の文字と表記』吉川弘文館
大西克也・宮本徹(2009)『アジアと漢字文化』放送大学教育振興会
太田辰夫(1954)「漢児言語について」太田(1988)所収
太田辰夫(1988)『中国語史通考』白帝社
Park, Si Nae(2013) De-coding cosmopolitan texts through Onhae texts, in Choson, Accessing the Cosmopolitan Code in the Sinographic Cosmopolis, 2013 年 6 月 18 日, 早稲田大学発表資料
Pollock, Sheldon (2006) *The Language of the Gods in the World of Men*, University of California
Poppe (1960) *Vergleichende Grammatik der altaischen Sprachen*, Otto Harrassowitz, Wisbaden
S・R・ラムゼイ, 高田時雄他訳『中国の諸言語』大修館書店(原本刊行 1987)
Ramstedt,G. J. (1954)*Additional Korean Etymology*, collected by Pentti Aalt, Suomalais-ugrilian seura, Helsinki
Ramstedt, G. J. (1982) *Paralipomena of Korean Etymology,* collected and edited by Songmo Kho, Suomalais-ugrilian seura, Helsinki
李成市(1998)『古代東アジアの民族と国家』岩波書店
李成市(2002)『古代朝鮮の漢字文化』国立歴史民俗博物館(2002)所収
李成市(2007)「古代朝鮮における漢字文化の受容過程」朝鮮史研究会第 44 回大会発表資料
李成市(2013)「朝鮮半島出土の『論語』竹簡・木簡に関する考察」Accessing the Cosmopolitan Code in the Sinographic Cosmopolis, 2013 年 6 月 16 日, 早稲田大学発表資料
斉藤希史(2007)『漢文脈と近代日本』日本放送出版協会
杉山正明(2011)『遊牧民から見た世界史　増補版』日本経済新聞出版社
孫宏開, 胡増益, 黄行(2007)《中国的語言》商務印書館
宋兆祥(2011)《中上古漢朝語研究》中国社會科學出版社

武田幸男(1989)『高句麗史と東アジア』岩波書店

武田幸男(1995・1996)「三韓社会における辰王と臣智」上･下『朝鮮文化研究』2･3, 東京大学文学部朝鮮文化研究室

武田幸男(1997)「朝鮮の古代から新羅・渤海へ」礪波護・武田幸男(1997)所収

田中史生(2005)『倭国と渡来人』吉川弘文館

礪波護・武田幸男(1997)『隋唐帝国と古代朝鮮』中央公論社

築島裕(1995)『日本漢字音史論輯』汲古書院

Walraven, Boudewijn (2004) Book culture in Korea: meetingpoint of intellectual, social and history, *AKSE Newsletter 28*, Leiden

Whitman, John (2010) The Ubiquity of the Gloss, *Writings and* Civi*ization*, The Hunmin jeongeum Society

吉村武彦(2010)『ヤマト王権』岩波書店

鄭張尚芳(2003)『上古音系』上海教育出版社

朱瑞平校点(1997)『朴趾源　熱河日記』上海古籍出版社